

## 第X章 考 察

### 1. 豊岡台地の中世資料（田原坂の戦い前史）

田原坂の戦いの主要地である豊岡台地において、その前史で最も豊富に認められるのは中世資料である。本台地は、斜面が急勾配で、縁辺には小支谷が複雑に入り組み、これによって分断された舌状の小丘陵が発達しており、要害地形といえる。台地下には木葉川・中谷川が、三方を囲むように流れている。また、植木と有明海沿岸の主要川湊である高瀬津とを結ぶ高瀬道（後の三池往還）が貫通している。こうした地勢や交通要件が、中世人にとって適地とされたと考えられる。以下、種類ごとに主な資料を紹介する。

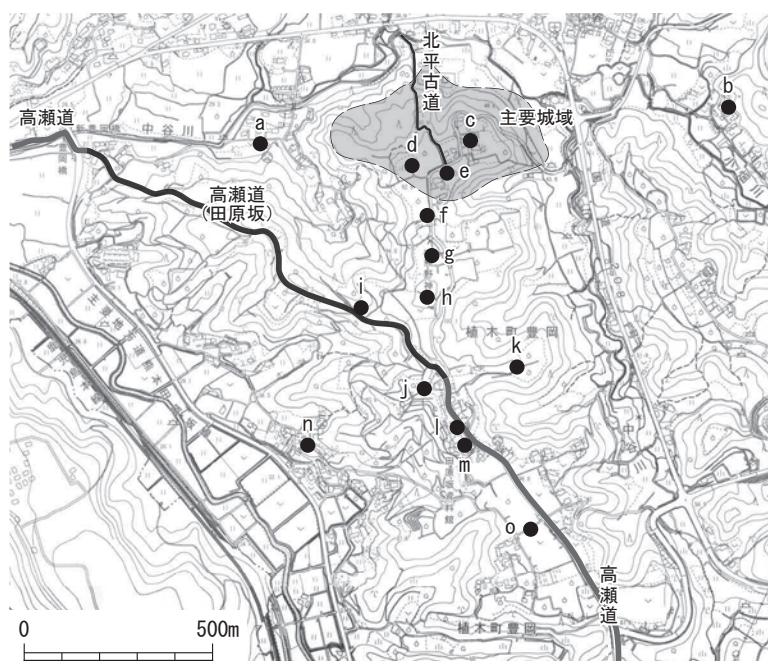
#### a. 城跡・寺社

本台地北側には田原城跡がある。縄張を示す遺構は不明であるが、田原の五輪塔（f）付近の東西両方向から支谷が入り込む狭隘な箇所より北側一帯が城域の主要部で、うち最高所の平場が主郭（d）と推定される。この平場の小名は「城山」で、周辺の小名には「西の門」・「高見」・「殿の屋敷」などがある（熊本県教委 1987）。また、北に延びる里道「北平古道」は、現在でも地元で「城下坂」と通称されている。主郭推定地において実施した本調査（田原城跡・田原寺跡調査地）では中世遺物が出土しており、後述するように出土量は他の調査地よりも圧倒的に多い。

その他、第1図外ではあるが、中谷川を挟んだ北東側の丘陵地には、大平城跡・内空閑城跡・荒平城跡（第III章第1図2・4・9）がある。いずれも肥後最大の中世領主である菊池氏に属しつつ、その滅亡後の戦国期末まで続いた山本郡の有力国人領主、内空閑氏の居城と伝わる（熊本県教委 1978）。一方、南側には鞍掛山城跡・埋原城跡・轟城跡（第III章第1図45・48・64）があり、うち鞍掛山城跡は、天文20年（1551）、菊池26代義武を頼った大友家家臣の田原親賢が籠城したと伝わる（後藤 1916）。

寺社には、田原寺跡・田原熊野座神社がある。田原寺は現存せず、建治3年（1277）銘の田原の五輪塔（f）の地輪銘に「田原寺」とあることから存在が想定されている。実態は不明ながら、水輪4面に種子キリクが刻されていることから浄土系寺院であったと考えられ、『肥後国誌』「田原村」の項に「弥陀堂」（表題のみ、説明文無し）との記載があることから（後藤 1916）、江戸時代後期においては、恐らくは衰退しながらも小さな堂として残っていたものと推察される。

田原熊野座神社（g）は、境内が西南戦争の舞台となり、現在も鎮守社として地域の崇敬を受け、管理・保護されている。縁起の詳細は不明であるが『肥後国誌』に「社帳云菊池氏建立ト云傳フ」（後藤 1916）とあり、中世の創建であることが判る。本調査において、戦時の焼失により被熱・変形したものではあるが、神体であろう、中世の和鏡片が採集されており、このことが証傍される。ところで、植木町内には本社以外にも菊池氏創建と伝わる寺社が多い。特に菊池に至る往還沿いに位置する中尾正観寺は、菊池15代武光創建で菊池五山の上位別格に位置付



第1図 豊岡台地における中世の主要資料分布図（1/20,000）

第33表 豊岡台地における中世の主要資料一覧

※No.は第1図に対応

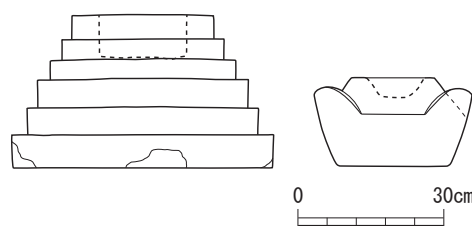
種別	No.	名称	内容	備考・文献
城	d	田原城跡	台地北側の最高所の平場が主郭と推定される、周辺に「城山」・「西の門」・「高見」・「殿の屋敷」などの小名あり、北平古道は地元では「城下坂」とも通称	熊本県教委1978
寺社	g	田原熊野座神社	中世創建／「社帳云菊池氏建立ト云傳フ」『肥後国誌』	後藤1916
	f	田原寺	田原の五輪塔地輪の記銘「田原寺」より存在想定、水輪4面にキリク(浄土寺院か)	市指定文化財
石造物	a	谷の板碑	中世後期(年紀不明)／自然石、図像板碑、阿弥陀如来線刻	中村1981
	b	小畑天神社の板碑	永禄3年(1560)銘／自然石、月輪内キリク	中村1981
	e	田原本村の五輪塔水輪	14世紀／樽形、追刻「三界萬靈」	中村1981
	f	田原の五輪塔	建治3年(1277)銘／田原寺院主膺慶カの供養塔、水輪4面にキリク	市指定文化財
	f	田原の板碑	天正13年(1585)銘／田原の五輪塔脇、自然石、法印重慶の逆修碑	市指定文化財
	f	菊鹿型宝篋印塔基礎	14世紀後半／田原の五輪塔脇、菊池氏との関連性が強い型式、植木町初例	本報告
	f	肥前の小五輪塔火輪	16世紀末／田原の五輪塔脇、肥前からの搬入、天正9年の龍造寺氏伸張の影響	本報告
	l	田原坂公園板碑	大永7年(1527)銘／自然石・図像板碑、阿弥陀如来線刻	多田隈1975
	n	舟底五輪塔	元亨2年(1322)銘／別名「厳島神社塔」、厳島神社境内、円台寺僧貞珍の供養塔	県指定文化財
	n	舟底板碑2基	天文16年(1547)銘／厳島神社境内、2基とも自然石・五輪塔浮き彫り、1基に紀年銘	県指定文化財
仏像	n	舟底の十一面観音立像	大永4年(1524)銘／木像、背面墨書銘	中村1981
遺構	h	熊野座神社南の里道	東西方向、堀あるいは小規模な切岸と伝わる	地元の聞き取り
	i	谷村計介碑調査地	土師器小皿(中世後期)出土の東西方向の溝跡、西南戦争時に塹壕として再利用	本報告
	k	舟底遺跡確認調査	瓦質土器播鉢(14～15c)出土の南北方向の溝跡	熊本市教委2024
	m	舟底遺跡第6・9次調査	瓦質土器火鉢・鉢(16c～17c前)の埋設土坑、掘立柱建物跡(詳細時期不明)	熊本市教委2016
遺物	c	田原城跡確認調査	龍泉窯系青磁碗(15c後～16c前)、瓦質土器火鉢(16c～17c前)・播鉢(14～16c)、鉄滓	熊本市教委2011
	d	田原城・田原寺跡調査地	土師器坏・小皿(主に12c中～13c)、黒色土器碗(11c末～12c中)、中世須恵器甕(13c後～14c初)、東海産陶器鉢(13c前)、東播系須恵器鉢(12c後～13c初)、龍泉窯系青磁碗・小碗(12c中～後)、同青磁碗大宰府Ⅱb類(13c～14c初)、福建産白磁碗(13c中～14c初)、瓦質土器火鉢(14c～17c前)・播鉢(14～16c)・肥後型鍋(15c)・甕(15～16c)、備前産播鉢(14c後)、鉄滓	本報告
	g	熊野座神社調査地	土師器坏・小皿(13c～14c中)、和鏡、皇宋通宝(模鑄銭)	本報告
	i	谷村計介碑調査地	土師器小皿(中世後期)	本報告
	j	田原坂公園北半部調査地	土師器小皿(12c中～13c前)、瓦質土器播鉢(14c～17c前)	本報告
	k	舟底遺跡確認調査	東播系須恵器甕(12c末～13c初)、瓦質土器播鉢(14・15c)、龍泉窯系青磁碗(13c、15c後～16c前)、景德鎮窯系青花皿(15c後～16c前)	熊本市教委2024
	l	田原坂公園板碑脇	瓦質土器多く出土(菊花文印文あり)と伝わる、中世後期か	中村1981
	m	田原坂公園南半部調査地	瓦質土器火鉢・播鉢・捏鉢・浅鉢・小鉢・鍋・香炉(16c～17c前)	本報告
	m	舟底遺跡第6・9次調査	瓦質土器火鉢・鉢・甕(16c～17c前)	熊本市教委2016
	o	藤原遺跡第2次調査	福建省産白磁碗(12c)、龍泉窯系青磁碗(15c後～16c前)、瓦質土器火鉢・播鉢・甕(14～16c)	熊本市教委2015

※上記の他、踏査において台地各所で中世遺物を採集している。

けられる菊池市正観寺の末寺とされ、周辺の清水一帯が正観寺領となっていたことから(中村1981)、山本郡における菊池氏支配の前進拠点であったと考えられる。本台地の近くでは、金峰山三ノ岳麓の龍源寺跡(第Ⅲ章第1図55)があり、肥後権守と称された菊池6代隆直の創建と伝わる(後藤1916)。このことは、平安時代後期において、菊池氏が肥後国一円に勢力を伸張し、一族を検田使や収納使などの国使として各郡に派遣していくなかで、山本郡もその影響を強く受けたことを反映すると考えられる。

**b. 石造物**

石造物は多く、本台地の各所に認められる。まず挙げられるのは、前述の田原の五輪塔(f)である。高さ171cmの大形塔で各輪のオリジナルが揃っており、13世紀後半における肥後の五輪塔型式の基準資料といえる。ここでは、その脇に寄せられた石塔の部材に注目する。菊鹿型宝篋印塔の6段基礎(f)は、主に県北の菊池・鹿本地域に分布し、菊池氏との強い関連が指摘される地域性の強い型式である。山本郡における初例で、14世紀後半に位置付けられる。前述のように菊池氏の勢力が山本郡に伸長し、山本郡最大の荘園である山本荘についても、概ね15世紀代までは一元的ではないにせよ菊池氏が荘官職として支配していたこと(中村1981)などを反映したものと考えられる。小形五輪塔火輪(f)は、軒端

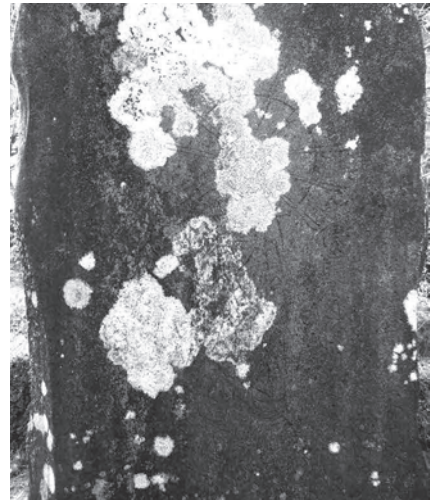


菊鹿型宝篋印塔・肥前の五輪塔(1/15)

が角状に突出する肥前地方に特徴的な形状を呈する。16世紀末に位置付けられ、形状のみならず、肥後においてはこの時期に使用されない硬質・多孔質の安山岩製であることから搬入品と判断される。管見では県内初例であり、時期性を鑑みれば、天正9年(1581)に龍造寺氏が肥後北部に勢力を伸張し、山本郡もその支配下に入ったとみられること(中村1981)との関連を指摘し得る。以上2例は、本台地における中世の動態を明確に反映するものと評価される。

本台地西岸には舟底五輪塔(n)がある。元亨2年(1322)銘、円台寺僧貞珍の供養塔である。円台寺は、本台地の南西側、金峰山三ノ岳麓にある延暦寺末寺で、鎌倉時代初期に豊後国守護の大友能直により創建、大永6年(1526)、大友氏により修繕されたと伝わる。大友氏は、豊後を本貫としながらも肥後にも地歩を伸張しており、室町期には山本荘の地頭に補任されている(中村1981)。

板碑は、いずれも安山岩製の自然石板碑で、年紀不明のものも含め、熊本県内で自然石板碑が隆盛する16世紀代に位置付けられ、このうち、谷の板碑(a)・田原坂公園板碑(l)には阿弥陀如来像が線刻されている。玉名市の本堂山など、玉名地域には16世紀代の線刻図像板碑が多いことを付記しておく。



田原坂公園板碑

### c. 遺構

掘削を伴う調査地が少なく、その多くが小規模なトレンチ調査であることによるものであろうか、検出遺構は少ない。溝跡は台地北部の3箇所において検出されているが、いずれも前述の田原城跡(d)に直結するものかは不明である。

中世後期の土師器小皿が出土した谷村計介碑調査地の溝跡(i)は、東西方向に伸び高瀬道(田原坂本道)とほぼ平行している。溝が二股に分かれる箇所を検出したとみられ、2本の想定幅は約2.5m・3.0m、検出面からの深さは深い箇所約80cmと小規模である。規模・形状から、硬化面は未検出ながら踏み分け道のような凹道と想定される。なお、この溝跡は、西南戦争時には塹壕として利用されている。

舟底遺跡確認調査地(令和元・2年度調査)の溝跡(k)は、東側に延びて端部が広がる舌状の小丘陵において検出された。幅は2.2~2.5m、検出面からの深さは深い箇所約1.2m、小丘陵基部寄りの幅狭な箇所を南北に貫く区画溝で、14~15世紀代の瓦質土器播鉢が出土している。現況は営農により削平されているが、溝跡により分断された東側には、本来、中世の建物跡などの構造物が存在していたと推察される。この地も西南戦争時には薩摩軍の一拠点となり、戦闘があったことが判明している。

台地の南寄り、田原坂を上りきった場所にある田原坂公園内には、16世紀~17世紀前半に位置付けられる瓦質土器の出土が目立つ。舟底遺跡第6・9次調査地(m)では、掘立柱建物跡・瓦質土器の埋設土坑などを検出している。重複が無く短期間の造営であったと考えられること、出土遺物は少量で、瓦質土器火鉢・浅鉢が主体を占める一方、当該期の土師器・陶磁器の供膳形態が無いことなど、造営期間、遺物の器種組成において特異な様相を示している。報告書(熊本市教委2016)では、加藤清正によるとされる周辺各地の軍事道路整備を念頭におき、「一般集落と考えるより田原坂整備修築のための工人集落の一部の可能性」を指摘している。肯首すべき見解といえる。

### d. 遺物

本台地全域各所において、概ね中世全般を通した時期の資料が認められる。最古のものでは田原城跡・田原寺跡調査地(d)から出土した10世紀後半~11世紀代に位置付けられる土師器坏1点(34)があるが、

量化するのは12世紀中頃以降である。器種形態は、中世前期では土師器坏・小皿、中世後期では瓦質土器火鉢・播鉢が主体を占める。中国陶磁器が認められることは注目できるが、いずれも普遍的な形態（中世遺跡で一般的な龍泉窯系青磁碗など）であり、また少量でもある。これを所有し得る上位の階層者がいたとは考えられるが、このことをもって領主層レベルの存在までを判断することは難しいといえる。

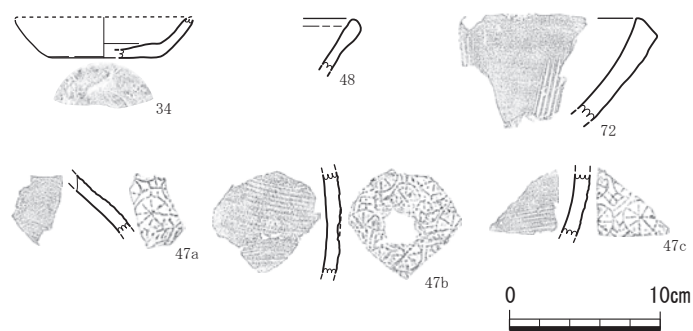
特筆される調査地は、田原城跡主郭と推定される田原城跡・田原寺跡調査地（d）で、遺物量は他の調査地より圧倒的に多い。以下、いずれも小片ながら注目される資料について列記する。

○ 東海産陶器鉢（48）：胎土・色調から常滑産の可能性が高く、13世紀前半に位置付けられる。肥後地方では、東海産資料は常滑焼甕が一般的で広域流通品として普及しているが、鉢類は普遍的ではなく、出土する遺跡も限定的である。国衙周辺都市の熊本市二本木遺跡群、その外港の同市高橋南貝塚（筆者実見）、玉名市の高瀬津付近の菊池川河床採集品（美濃口2023）など主要な経済拠点に認められる。甕類の一括購入に伴って搬入された可能性を指摘できる。

○ 備前焼播鉢（72）：14世紀後半の型式である。熊本県内における備前焼の出土は15世紀から量化しており、この時期に備前焼の流通圏に組み込まれ普及していったと考えられるが、本例は、県内出土例としては最古期に位置付けられ、流通圏確立の前段階に搬入されたものといえる。

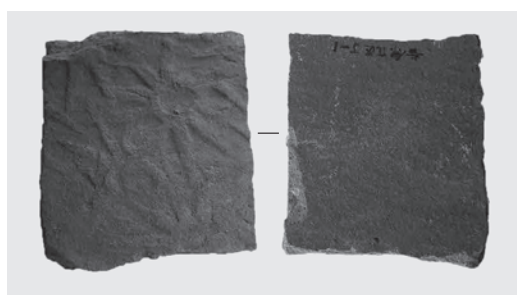
上記2例は稀有な出土例というだけでない。その意義は大きく、地理的環境から特に菊池川下流の高瀬津との関連が想定される。高瀬津は前述のように有明海沿岸における主要な川湊で、肥後の中世において最も繁栄し、国内外の人の往来があり、近くには中国人の居留地もあった（玉名市役所1987）。このことを実証するように、付近の河床からは極多量で多岐に及ぶ国内外の土器・陶磁器類が採集され、なかには通常の流通品ではない稀有な資料も認められる。また、周辺の遺品には嗜好性の高い優品も見られる。こうした経済拠点と本台地とが街道（高瀬道）で直結していたことが、上記2例出土の背景と考えられる。加えて、11世紀後半～16世紀中頃において高瀬津を菊池氏が掌握していたことも重視される（玉名市役所1987）。前述のように平安時代後期、遅くとも12世紀後半には山本郡は菊池氏の勢力下に入っており、物流においてもその影響を受けたものと考えられる。

○ 中世須恵器甕（47）：13世紀後半～14世紀初頭に位置付けられる。在地産とみられる一連叩打技法成形の甕で、外面タタキに車輪文が認められる。熊本県内には、こうした装飾性を意識した甕に山形文タタキを施すものがあるが、車輪文例は極稀有で、県内の類品は管見の限り熊本市吉原遺跡例のみである。本資料出土の背景として、中世須恵器の生産に関わったであろう、領主層の存在を指摘したい。県内の中世須恵器窯としては荒尾市樺番城窯跡が著名で、その製品や同系の製品が県内各地の中世遺跡において出土している。樺番城窯製品については岡山県倉敷市亀山焼との近似性の高さから、亀山焼からの工人招聘などの技術導入が想定されている。遠隔地にも関わらず、こうした状況が生じた要因としては、宝治元年（1247）に荒尾市域の野原荘地頭に補任された小代氏と、同じく武蔵七党の児玉党を出自とし、その旗頭



※番号は第V章第30・31図のママ

田原城跡・田原寺跡調査地の注目遺物（1／5）

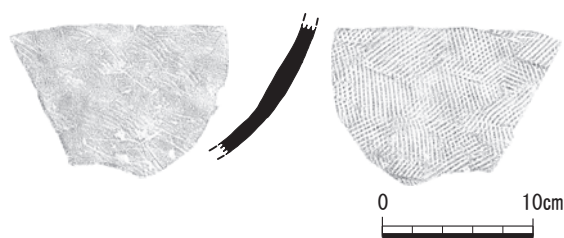


※熊本市文化財課蔵、未報告

吉原遺跡の車輪文タタキ甕

で倉敷市域の草壁荘地頭となっていた庄氏との密接な関係性を考えたい。彼らはその経済活動として須恵器生産に関与し、樺番城窯の創業や亀山焼からの技術導入については、庄氏の関与のもと小代氏が主導したと想定できる（美濃口 2023）。中世須恵器の生産には領主層が大きく関わり、これを掌握していたのであろう。本資料は、外面タタキ文様を除いて、時期・製作技法とも樺番城窯資料と同じであり、同系の窯で生産されたものと考えられる。以上を踏まえ、また、極稀有ということ、すなわち通常の流通品ではないことを鑑みれば、本資料の入手については、生産地からの直接的な購入やこれを掌握していた領主層との関係性があつたとみることができるといえる。単に珍しいというだけではなく、この地に有力な人物がいたことを反映する資料と評価したい。

上記の他に、舟底遺跡確認調査地（k）出土の東播系須恵器甕に注目する。外面に樹枝文様のタタキ痕を認め、12世紀末～13世紀初頭に位置付けられる。熊本県内出土の東播系須恵器は鉢が多く、中世遺跡では普遍的に見られるものの、甕は極少なく、生産地でも一般的なものではない樹枝文様タタキ例は管見によれば県内初例である。通常の流通品ではなく、鉢の購入に付帯して受容されたものとみられる。



舟底遺跡確認調査地の東播系須恵器甕（1／5）

#### e. 小結

豊岡台地においては城跡・寺社・石造物・仏像・埋蔵文化財（遺構・遺物）などの中世資料が見られる。これらには、当該地の歴史動態を明確に反映し、特に菊池氏との関連を指摘し得るものがあり、上位階層者の存在が想定できる。その主要因は、前述のように本台地が要害地形で、かつ高瀬津に至る高瀬道が貫通しているという地勢や交通の要件が、彼らにとって適地とされたためと考えられる。

このことは、時を経た西南戦争時においても同様で、中世人が選んだ要害は近代人も着目することとなった。本台地だけではなく、西側対岸台地の政府軍二俣瓜生田砲台跡においても中世の大溝跡が検出されている（玉東町教委 2012）。以上のことから、豊岡台地について、これをまずは政府軍が注目し次いで薩摩軍が蟠踞したのは歴史的必然であったといえよう。

#### 〔参考文献〕

- 玉東町教育委員会 2012『玉東町文化財報告第8集 玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』
- 熊本県教育委員会 1987『熊本県文化財調査報告第30集 熊本県の中世城跡』
- 熊本市教育委員会 2011『熊本市の文化財第4集 平成18年度植木町内遺跡発掘調査報告』
- 熊本市教育委員会 2015『熊本市の文化財第45集 藤原遺跡 市道宿～藤原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 熊本市教育委員会 2016『熊本市の文化財第57集 舟底遺跡Ⅰ 第6次・9次調査、田原坂資料館改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
- 熊本市教育委員会 2024『熊本市の文化財第115集 熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集』
- 後藤是山編 1916「増補校訂肥後國誌 上巻 山本郡 肥後藩土 森本一瑞遺纂」『肥後國誌』九州日日新聞社印刷部
- 多田隈豊秋 1975『九州の石塔 上巻』財団法人西日本文化協会
- 玉名市役所 1987『玉名市歴史資料集成第一集 高瀬湊関係歴史資料調査報告書（一）』
- 中村一紀 1981「第二章 中世」『植木町史』植木町
- 美濃口雅朗 2023『菊池川河床採集遺物調査報告書—中世の国産陶器・土器類 中世の石造物・銭貨—』菊池川河床採集遺物研究会

## 2. 西南戦争遺跡

豊岡台地北部や田原坂本道周辺は大きな改変は受けておらず、旧状を比較的良好に残している。現在の田原坂は長さ約 1,160 m、道幅約 4 m、標高は一ノ坂口 25.9 m、三ノ坂上の崇烈碑付近 106.9 m で比高は 81 m である。田原坂が通る豊岡台地一帯は、地理的環境によって歴史的環境が出現した、地理と歴史が密接不可分の関係にあることを明確に示す場所である。

### a. 遺構

#### (1) 確認された遺構

戦場全体からみれば調査地は少ないが、第V章現調査の成果で報告したとおり、各種の調査や分析を通じて戦いや陣地の状況が見えてきた。田原坂調査地で遺構が確認されたのは、熊野座神社調査地（以下調査地は略す）の陣地状遺構、本道二ノ坂の溝状凹部（塹壕跡）、谷村計介碑の溝状凹部（塹壕跡、交通壕跡）、田原坂公園北半部の溝状遺構（塹壕跡、交通壕跡）と塹壕跡、土坑（仮埋葬墳）、砲弾片着弾跡、同南半部の 9 T 段畑の畔土手、舟底遺跡第 6 次調査の道路状遺構である。

熊野座神社の陣地状遺構は直線土手と半円形土手があり、銃眼状に一部低い部分もある。遺物は少ないが、立地的には良い場所にある。神社境内地なので取り壊しを免れたのかもしれない。塹壕跡は多く、遺物の採集・出土も多い。基本的に塹壕跡は旧来の溝状凹部（おそらくは中世遺構）を掘削改変して塹壕に利用したもの一本道二ノ坂溝状凹部、谷村計介碑溝状凹部、田原坂公園北半部 5 T 6 T 塹壕跡が多いが、新たに掘削したと思われる公園北半部 1 号・2 号溝状遺構もある。再利用は底面が平坦で掘削工具痕があり幅が広く、新規掘削は幅に広狭があり壁面凹凸が目立つなどの特徴がある。いずれも応急的なつくりで、古写真に写る塹壕陣地と似ている。

ただ、文献のいう「直ニ地ヲ鑿テ横隧（横穴）ヲ爲シ」「悉ク穴居ノ状ヲナシ」の状況とは異なるようだ。それらの陣地は「坂上正面の賊壘の如き、大抵能く地形に応じて築き」「堡壘ヲ其要衝ニ築キ、碁布星羅互ニ拮角ノ勢ヲ成シ」と、碁盤や星空のように数多く並べて連ねて築かれ、互いに連携して戦うと記されているが、現地調査では、文献記述のような具体的な陣地状況は明確には把握できなかった。今後の調査に期待したい。なお、戦後の遺構としては、公園北半部の土取場跡がある。

#### (2) 銃砲弾からみた薩摩軍の陣地配置（第 2 図）

田原坂戦は政府軍の使用推定銃砲弾数約 548 万発で、調査で確認した砲弾片と小銃弾は小片を含めて 3,500 点強である。わずか 0.07%、1/1,500 に過ぎない。この微々たる数字から田原坂の戦いを検討するには躊躇する。また、調査地の改変程度によっても、数値は大きく変動する。しかし、今後の糧とするため、各調査地の成果と傾向をもとに薩摩軍の陣地配置の検討を進めたい。

戦地の数値化、客観化の一環として、一覧表を作成した。単位面積当たりの銃弾数と砲弾数を算出し均質化して相対的に他所と比較することで、どこに陣地があったのか、どこが激戦地だったのかを推定しようとするものである。表は田原坂各調査地の小銃弾と大砲弾の採集出土数と 10 m × 10 m の 100 m<sup>2</sup>あたり密度を算出したもので、出土量が少ない調査地は省略した。

小銃弾の採集出土数が多いのは順に本道二ノ坂、熊野座神社、公園北半部、田原城跡・寺跡、北平古道で、密度が高いのは公園南半部 9 T 段畑、熊野座神社杉木、本道二ノ坂集中部である。他はその 1 割程度かそれ以下である。採集出土数が多い場所は戦後の土地改変がない場所で、改変がある耕地や公園は少ない傾向がある。これからみると、本道二ノ坂、熊野座神社、公園北半部の 3 カ所が土地改変が少なく、採集出土数と密度が大きい場所で、次いで谷村計介碑、市有地（北）、田原城跡・寺跡が続く。

大砲弾の採集出土数が多い調査地は熊野座神社、公園北半部、市有地（北）、本道二ノ坂、みかん小屋で、密度では公園南半部 9 T 段畑、熊野座神社杉木が高く、市有地（北）・（南）、熊野座神社、公園北半部が続く。これからみると、熊野座神社、公園北半部、市有地（北）・（南）の 3 カ所が採集出土数と密度が大きい場

所である。また、政府軍と薩摩軍の火砲攻撃力の差は、今回調査では明確には把握できなかった。

小銃弾と大砲弾の採集出土が多い場所が盛んに攻撃を受けていた場所であろうから、その場所には薩摩軍の主要陣地が存在した可能性が高い。熊野座神社、市有地（北）・（南）、公園北半部の3カ所の調査地がそれで、政府軍砲台の砲撃範囲に入っている。このような検討と立地地形からみて、陣地規模を大中小の3つに分けて配置推定図を作成した。（本道二ノ坂調査地は政府軍陣地と推定されるので除く）

**消失陣地、埋没陣地** これらの数字や遺構から、削平などによる消失陣地や埋没陣地も推定できる。熊本市有地（北）・（南）の東側平坦地、田原坂公園北半部の崇烈碑付近、同南半部の「西南役戦没者慰霊之碑」と熊本市田原坂西南戦争資料館付近である。

熊本市有地（北）・（南）東側は削平地で、周辺地形や古地図からみるともとは南に延びる痩せ尾根状地形の高所だったようで、田原坂本道と北平古道から続く脇往還が合流分岐する場所に面し、古写真に写る「松下家の弾痕土蔵」が所在した場所である。本道向かいには田原坂公園北半部があり、北と南から連携して街道口を圧迫閉塞していたことが推定される。

公園北半部崇烈碑付近は建碑工事によって削平盛土されていたが、本来は小高く東西に細長い地形で西の二俣台地に対峙した陣地だろう。街道口閉塞の点や分岐尾根が合する高所立地、聞き取り調査での遺構遺物、周辺の出張陣地などからみて最重要陣地の可能性が高く、田原坂の戦いにおける薩摩軍「本丸」陣地だったのかもしれない。このため、戦後にこの場所に崇烈碑が建立されたのだろう。

公園南半部は公園化が進み当時の地形を知ることは難しいが、大きな改変は行われていないので推察はできる。ここは二俣台地に向かって正面で、敵方がよく視認できる反面、敵方にも自身の陣地をさらすことになり攻撃の対象となる。左手南には激戦地の一つ「長窪山」があり、9 T 段畑の埋没陣地はそれに連なる陣地の一つだったと思われる。

## b. 文献

### (1) 戦死者数からみた田原坂の戦い

現地調査では知ることが困難な戦死者数から、戦いの実態を探る。日付戦闘地別の部隊数戦死者数の表では、戦闘地を豊岡台地北部と南部に大きく分け、従軍部隊数と主地点の戦死者数と政府軍消費スナイドル銃弾数を記した。

政府軍資料は第Ⅶ章文献調査第25・26・27表を主に使用し、薩摩軍資料は友野春久「西南戦争薩摩戦没者一覧（一～四）」『敬天愛人』第32～35号を使用した。同資料では全8,333名中戦没地判明は4,076名48.9%、うち熊本2,635名で、戦没地判明中では64.6%が熊本戦死である。

田原坂調査地における小銃弾と砲弾の出土採集数の密度

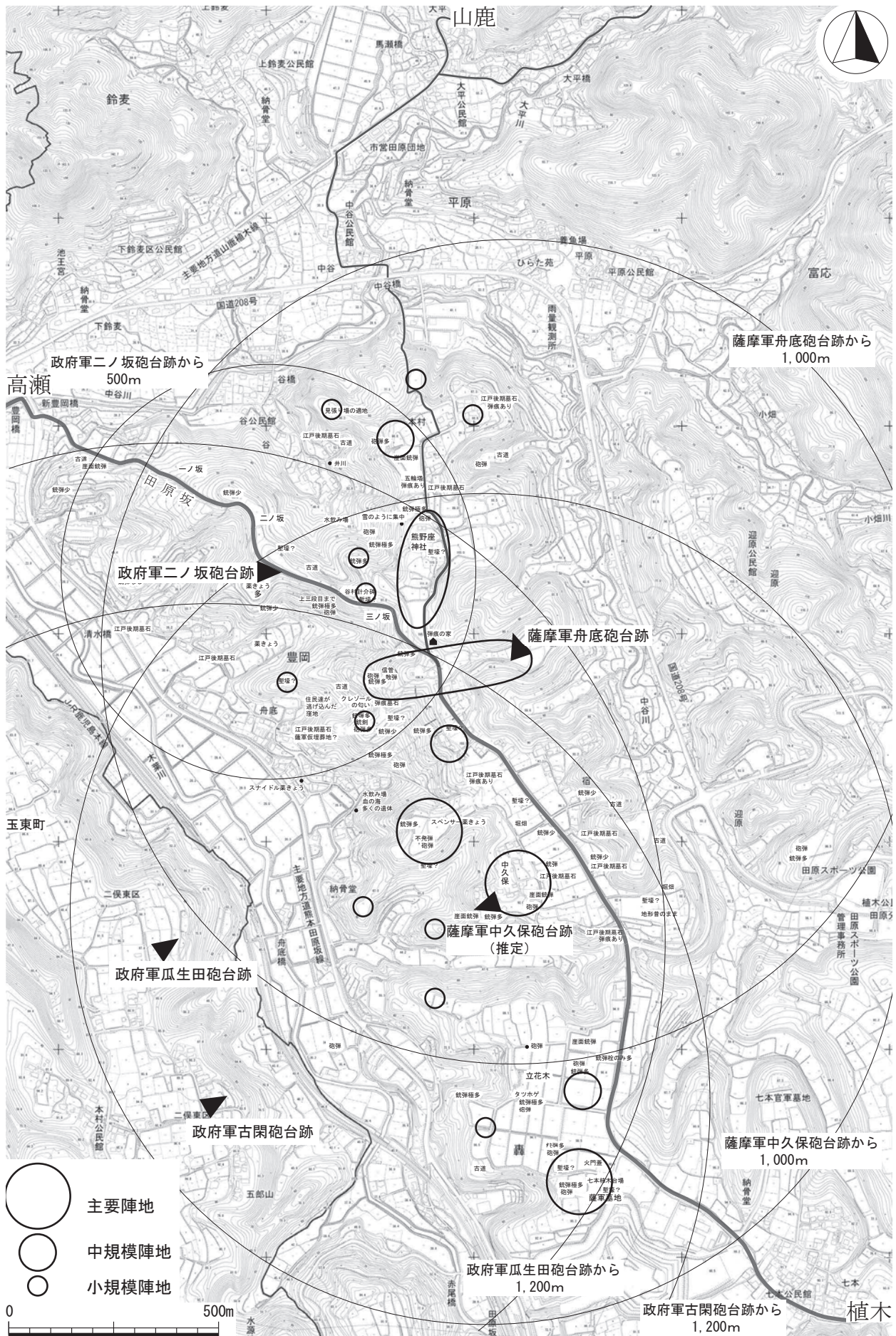
調査地	100 m <sup>2</sup> 当たり点数		調査面積 (m <sup>2</sup> )	出土数 (点)	
	小銃弾	砲弾		小銃弾	砲弾
北平古道	2.65	0.03	8,000.00	212	2
田原城跡・田原寺跡	3.24	0.06	7,000.00	227	4
熊野座神社	8.83	0.99	8,000.00	706	79
杉木	(94.72)	(4.51)	(22.17)	(21)	(1)
みかん小屋周辺	2.91	0.21	4,700.00	137	10
本道二ノ坂	14.95	0.13	10,041.00	1,501	13
集中部	(78.31)	(0.55)	(544.00)	(426)	(3)
集中部以外	(11.32)	(0.11)	(9,497.00)	(1,075)	(10)
谷村計介碑	16.50	0.13	800.00	132	1
熊本市有地（北）	13.46	1.22	1,226.00	165	14
熊本市有地（南）	2.72	1.09	368.14	10	4
田原坂公園北半部	3.64	0.60	7,196.54	262	43
田原坂公園南半部	0.14	0.02	5,078.81	7	1
9Tの段畑	(100.00)	(20.00)	(5.00)	(5)	(1)
資料館下	2.00	0.67	150.00	3	1
岡林遺跡	0.04	0.00	9,795.00	4	0
合計			62,350.49	3,366	172
平均 (岡林遺跡・公園南半部 及び集中部など除)	6.38	0.33	52,560.49		

#### 参考

玉東町横平山	5.48	0.05	8,680.00	476	4
玉東町半高山・吉次峠	2.83	0.15	47,200.00	1,337	73
西集中部	(14.77)	(0.90)	(3,000)	(443)	(27)
東集中部	(20.15)	(1.48)	(2,700)	(544)	(40)

註・小銃弾数は全種類の小銃弾で小片も含む。未使用弾は除く。

- ・砲弾数は信管・箭翼・霰弾子も含む。
- ・玉東町分は2012『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』玉東町教育委員会をもとに作成。
- ・（）は内数



第2図 各砲台からの攻撃範囲と豊岡台地における薩摩軍の推定陣地配置 (縮尺任意)

部隊数からは従軍兵員の概数が判明し、戦死者数との比較で戦闘程度と規模が推定できる。政府軍中隊と薩摩軍小隊はほぼ同規模数である。動員兵力では政府軍は日によって差があつて終盤の17日以降急増し、薩摩軍は中盤14日頃に増加するものの大きな変動はない。攻撃側と守備側の違いなのだろう。

政府軍の戦死者は豊岡台地北部の田原口、田原坂では3月7日137名を筆頭に戦死者が0の日はなく、間断なく戦死者が出続けている。南部の二俣・二俣口では8日49名から急増し、14日157名を筆頭に後半が多くなり、終盤では北部と数が逆転するようになる。スナイドル銃弾消費量は田原口では初戦から多く消費され、14日頃には45万発に達している。二俣・二俣口では6日から増え始め、すぐに田原口と多寡が逆転し中盤には大差となる。

薩摩軍は地名表記が政府軍と同一か否かの検証が不十分で、戦没日戦没地不明も多く、示した戦死者数が総数ではないことにも留意が必要である。判明中では北部に多く、特に田原坂での戦死者は絶える日がない。初戦から戦死者は多いが11日に急増し、14日、15日、18日に多い。一方、南部の戦死者は少なく、政府軍戦死者が最多の14日でも不明である。こうした不整合の検討を進める必要がある。

以上からみて、田原坂の戦いでは、当初は北部の田原坂本道方面の戦闘であつたのが、すぐに南部も戦場になり、後半では南部が主戦場になったことが、両軍の部隊数、戦死者数から考えられる。大きな戦期は14日で、この日から政府軍戦死者数、銃弾数、薩摩軍小隊数が多くなる。政府軍では終盤には初戦の3倍以上の中隊が投入される。これに伴い、銃弾消費数も増え1日50、60万発の多きに至つたようだ。これらは文献記述と一致し、現地調査の採集出土銃砲弾の具体的理解につながると考えられる。

## (2) 文献にみる田原坂本道周辺の地形と薩摩軍の陣地状況

古今、田原坂一帯の地形は多くの書物に記されてきた。大仰な表現もみられ、『西南記傳』にも形容が度に過ぎ実際とは異なるとの記述があるものの、内容は地形の特徴をよく表し薩摩軍の陣地状況も知れる

日付、戦闘地別の部隊数、戦死者数

戦 闘 地 等	政府軍								薩摩軍						政府軍消費銃弾数			政府軍 総攻撃	
	中 隊 数	主戦闘地別戦死者数							小 隊 数	主戦闘地別戦死者数					(本街道) 田原口	二 俣 口	計		
		北部			南部					北部			南部						
		田原坂	田原	豊岡村	七本	轟村	二俣口・二俣	計		田原坂	田原	豊岡村	七本	轟村					二俣口・二俣
日付																			
	4	13	30	4	1		4	39	24	14	6				20	86,000		86,000	1次
	5	7	4		1		15	20	14	1				3	4	128,000		128,000	
	6	19	65	5	1		8	79	18	17	9			1	27	110,500	63,000	173,500	2次
	7	23	137	15			4	156	20	10	4	1			15	81,000	106,000	187,000	3次
	8	23	35	7			49	91	17	11	8		1		20	50,000	63,000	113,000	
	9	21	50	12			16	78	18	21	3				24	50,880	119,600	170,480	
	10	7					49	103	16	4	3				7	23,000	38,000	61,000	
	11	23	45	9			49	103	22	49	15		2		66	12,000	186,100	198,100	4次
	12	11					12	24	18	22	7				29	50,000	203,000	253,000	
	13	9	7	5			12	24	22	10	6				16		40,000	40,000	
	14	18	13	1		6	157	177	33	42	12			1	55	450,000			抜刀隊
	15	8	17	7			35	59	32	37	10		11		64				
	16	17					40	104	24	12	1				13				
	17	31	56	5		2	40	104	24	16	4			1	21				5次
	18	35	16			8	75	99	25	36	10		2		48				
	19	2					84	135	20	6			1		7				
	20	35	36	12		2	1	84	23	17	9		3		29	平均 322,150 発 × 17 日間 =			6次
	計	302	511	82	3	18	1	548	1,163	370	325	107	1	20	1	11	465	5,476,550 発	

ので、一部改変して引用する。

『明治十年征討軍團記事』 第二回田原坂險 明治 13 年

田原坂ノ嶮要ナル阪道隧ノ如ク、羊腹崎嶇、兵略上守ルニ便ニシテ、攻ムルニ難キノ地勢タリ。我軍劇戰晝夜少シモ間斷ナキモ、毎ニ此地形ノ爲ニ阻礙セラレ遺憾ニ堪ヘザル者ナリ。(中略) 堅壘ヲ兩崖十數所ニ築ケリ。其壘タルヤ、尋常胸壁ノ比ニ非ズ。直ニ地ヲ鑿テ横隧ヲ爲シ、我進路ヲ遮斷シ、賊ハ悉ク穴居ノ状ヲナシ、以テ固守力戰ス。(中略) 故ニ全役ヲ終ルマテ其死傷ノ尤夥キハ、田原ロナリトス。

『征西戦記稿』 卷六田原阪戦記三月四日 明治 20 年

田原坂ノ地タルヤ外昂ク内低ク、恰モ凹字形ヲ成シ、坂勢峻急加ルニ一陟一降ノ曲折ヲ以テシ、坂ノ左右ハ斷崖峭壁ニシテ茂樹灌木之ヲ蔽ヒ、鬱蒼トシテ晝昏ク、詢ニ天險ト爲ス。賊堡壘ヲ其要衝ニ築キ、碁布星羅互ニ犄角ノ勢ヲ成シ、死ヲ以テ之ヲ扼ス。

『征西戦記稿』 卷九田原阪戦記三月二十日 明治 20 年 山県有朋参軍の田原坂地勢視察

田原坂の險たるや兩崖皆高くして街道は凹状を成し、坂を登て折るゝ数箇所、愈よ登て愈よ險なり。而して賊は此兩崖に拠り、或は壘を樹木鬱蒼の間に設け、或は壁を岩石嵯峨の際に築き、所謂一夫之を守れば三軍も行くべからざる地勢たり。

『西南記傳』 第三章田原方面の戦闘ニ薩軍の配備 明治 42 年

田原は玉名郡の低地より山本郡の高地に至る坂路にして、必ずしも斷巖絶壁の要隘あるに非ず、險阻重閉の控扼あるに非ずと雖ども、守るに便にして攻むるに難き地勢たり。坂上は田疇の中に在りて薩軍之に據り、天險を補ふに人工を以てし、堡壘碁布、随意に十字火を用ゆべく、而も其構造たる何れも強硬断面にして、巨砲も之を碎くこと能はず。加ふるに、將士一心、死を決して之を守り、縱令全軍塵滅に至るとも、尺寸を退かざらんことを期するものゝ如し。



薩摩軍陣地の状況 (『従征日記』3月20日より引用)



田原坂旅行記念絵ハガキ  
(脇往還と松之家弾痕土蔵、手前は田原坂本道)



稲藁土嚢と墓石の陣地 (植木陣山付近)



稲藁土嚢の陣地 (植木滴水)

## c. 遺物

### (1) 調査地毎の小銃弾の種類と比率（第3図・第4図）

田原坂調査地採集・出土小銃弾には多種多様な銃弾種類があり、加えて主用のスナイドル銃弾やエンフィールド銃弾に数種類のタイプがあることは、第IV章報告の方法、第V章現地調査の成果で記した。ここでは、調査地毎の小銃弾の種類と比率およびタイプ別をグラフ化し、その意味を検討する。

#### 小銃弾の種類と比率

本道二ノ坂調査地（以下調査地は略す）を除くすべての調査地で小銃弾の種類と比率は概ね同じで、スナイドル銃弾が圧倒的に多いことがわかる。スナイドル銃弾の比率は熊野座神社を除いて、谷村計介碑の95.3%からみかん小屋と舟底遺跡の98.4%まで、かなりの高率を占めている。この数字は『征西戦記稿附表全』の小銃弾南関砲廠（熊本県北地域全体の2月から4月）の93.3%を上回っており、田原坂の戦いにおいては強い戦略的意思をもって、スナイドル銃が使用されたことをうかがわせる。数値の類似性や調査地の立地からみて、これらのスナイドル銃弾の大部分は政府軍が発砲した可能性が非常に高い。

熊野座神社の93.8%はエンフィールド銃弾が多く相対的に数値が低下したもので、本来は他調査地と同様に高率であったことが推定される。エンフィールド銃弾が多いのは、第V章に記したとおりこの場所に陣地を構えた薩摩軍発砲に由来するためと考えられる。

田原坂陥落後4月初旬の戦闘遺跡の山頭遺跡では両軍陣地跡を調査して、政府軍陣地の第4次調査地はスナイドル銃弾84.5%、エンフィールド銃弾13.7%、薩摩陣地の第5次調査地はスナイドル銃弾92.2%、エンフィールド銃弾7.3%の数値が得られた（第6図）。政府軍は田原坂調査地よりやや低いほぼ同率で、陣地から多くのスナイドル薬莢出土もあり、スナイドル銃を主用していた姿が浮かび上がった。薩摩軍は小銃弾数からはスナイドル銃を主としエンフィールド銃が従となるが、出土の雷管数とスナイドル薬莢数は8割と2割で逆転している。このことは、小銃弾だけで判断することの危険性を示している。

**本道二ノ坂調査地** 本道二ノ坂調査地は全体でみるとエンフィールド銃弾の比率が高く、他調査地と異なっている。また、集中部と集中部以外では比率に大きな相違がある。スナイドル銃弾は集中部95.9%、集中部以外60.5%、エンフィールド銃弾は2.2%、35.2%である。集中部のスナイドル銃弾比率は他調査地と同率で、一見すると政府軍発砲にみえる。しかし、集中部では対峙するように隣接してスナイドル薬莢が大量に確認されており、この場所で同銃を発砲したことは疑いない。

本地は文献記録によると政府軍砲兵陣地近隣地で、薬莢は政府軍発砲の可能性が高い。つまり、集中部においては両軍ともにスナイドル銃を用いた銃撃戦が行われ、薩摩軍は意図して選択的にスナイドル銃を使用したことが考えられる。この理由は今後の検討課題である。このように、戦闘状況に応じて小銃を使い分けた可能性があることは考慮すべき事項である。

#### スナイドル銃弾のタイプ

スナイドル銃弾はP0～Bの9タイプに分類した（第IV章調査の方法2報告の方法a小銃弾と薬莢の分類参照）。銃砲と弾薬は幕末維新时期から国産や外国輸入品があり、多くの種類があった。各調査地のタイプ別比率はPタイプ1.8%～16.2%、A1タイプ2.0%～6.7%、A2タイプ51.9%～74.3%、Bタイプ12.1%～33.9%である。PとA1が少なく、次いでBでA2が最も多い傾向は各調査地同様である。一方で細かく見ると差異があり、谷村計介碑では他に比してA2が少なくBが多いなどの特徴がある。

このタイプの多さを理解するための一つとして、小銃弾の供給がある。田原坂の戦いに供給されたスナイドル銃弾は、第VII章文献調査によるとその多くが砲兵本廠備蓄分と推定され、それらは西南戦争開戦前からの製造と輸入品、加えて新規製造や新規輸入品など種々のものが混在していたようだ。これらは戦況の進展に伴って逐次戦地に送られたが、あまりの消費量の多さに備蓄分はほぼ払底するありさまだった。この頃には国内各地備蓄小銃弾も本廠にかき集められ、新規製造や外国輸入も続けられた。こうして遮二

無二小銃弾を集めて戦地へ送った結果、スナイドル銃弾に新旧多くのタイプが認められることになったと考えられる。スナイドル銃弾の新規製造や輸入が間に合わなくなると、他種の小銃が集められて戦地へ送られ、結果として「西洋式銃器の展覧会」のごとき様相を呈するようになった。

各調査地で各タイプが概ね同率の理由については、基本的には各タイプ銃弾の供給量に比例すると考えられる。また、本道二ノ坂調査地における薩摩軍発砲銃弾も、同様な比率であることは注目に値する。今後は戦場における分配体制や実態、戦争各期における各地の調査成果と比較検討する必要がある。

**Bタイプの製造** 陸軍省日誌明治十二年第二號1月18日の砲兵本支廠へ達書に「スナイトル弾ノ儀、是迄鑄造仕揚ノ分相用候處自今擽造弾ニ相定候條、別紙図式ニ準拠製作可取計此旨相達候事。別紙図式略之」アジ歴No.C08010475700(9～10/32)とあり、明治12年にはそれまでの鑄造弾から擽造弾に製造方法が変更になった。であれば、西南戦争時の国内製造弾(おそらくはBタイプ)は鑄造弾だったと考えられる。

この変更理由は、明治17年『火工教程』第二篇第一門スナイトル銃弾薬材料製造の鉛丸製作によると「鉛丸ハ(中略)其製法タル曩キニ之ヲ鑄造シタルモノ内裏ニ間々泡痕ヲ生スル等ノ弊害ヲ免レス、此ニ於テカ現今擽造法ヲ用ウ(後略)」との記述があるように、鑄造弾だと内部に鬆ができることがあるので擽造弾に変更になったようだ。ただ、擽造前工程の鉛丸原形製造は鑄造である。

(2) 薬莖部品と圧入栓の比率

薬 莖

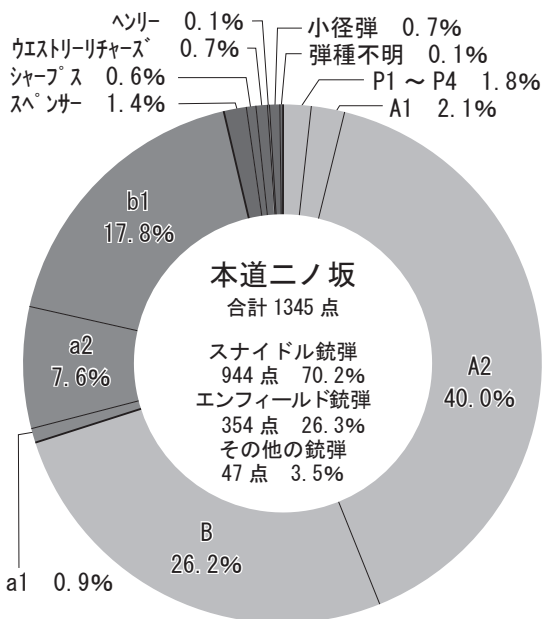
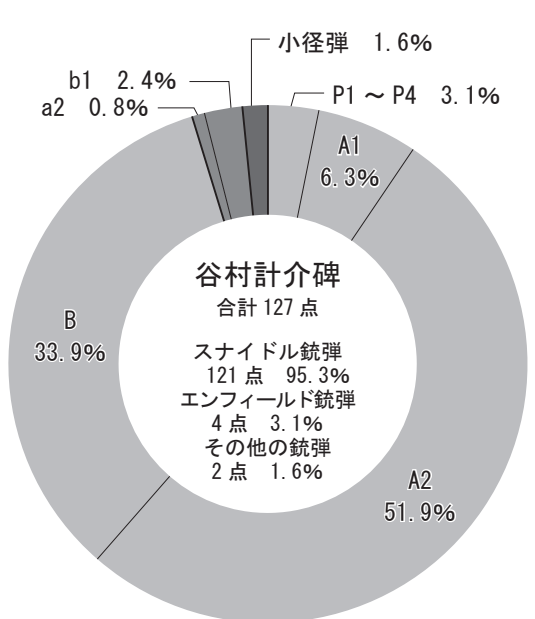
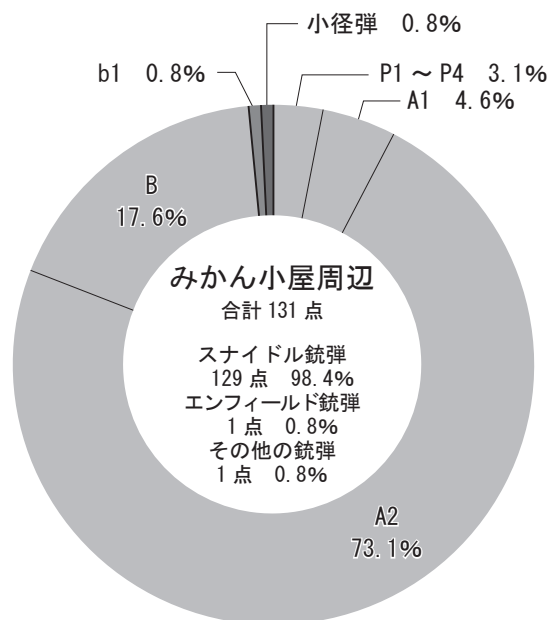
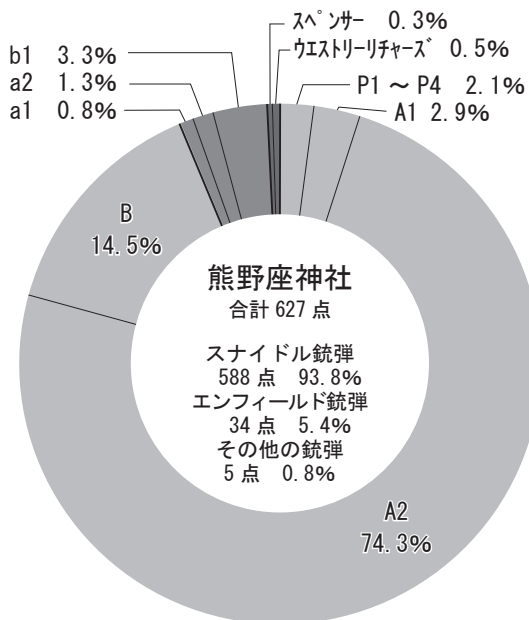
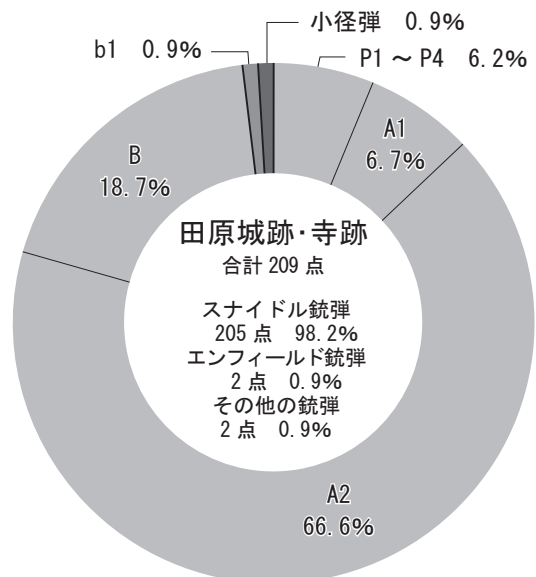
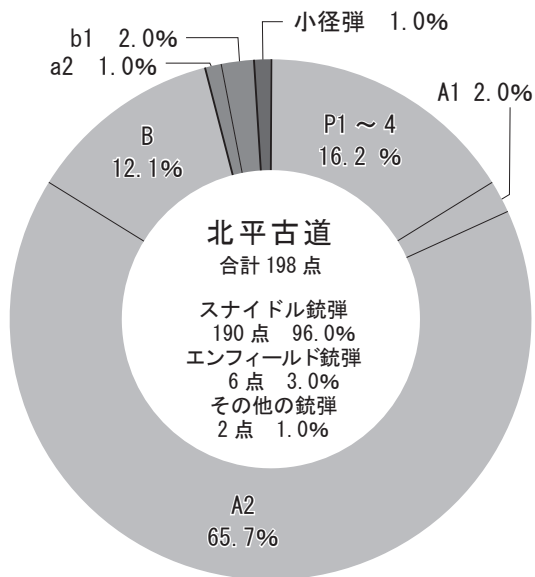
スナイドル薬莖の雷管室上部を欠くものは、熊野座神社調査地(以下調査地は略す)94点中9点9.6%、田原城跡寺跡91点中13点14.3%、本道二ノ坂集中部382点中21点5.5%、山頭遺跡薩摩軍陣地跡150点中19点12.7%、同政府軍陣地跡559点中4点0.7%である。

薩摩軍陣地の熊野座神社、田原城跡・寺跡、山頭遺跡薩摩軍陣地跡で9.6%～14.3%、政府軍陣地の本道二ノ坂と山頭遺跡政府軍陣地跡では0.7%～5.5%である。これからみると、薩摩軍陣地の薬莖雷管室は破損率が高く、政府軍陣地のものは破損率が低いことが考えられる。

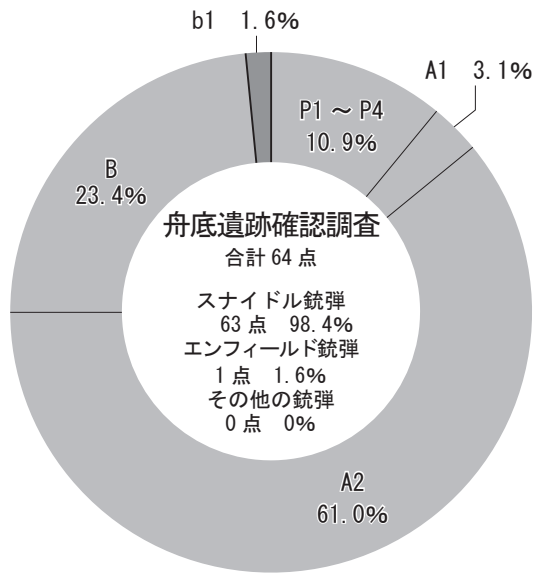
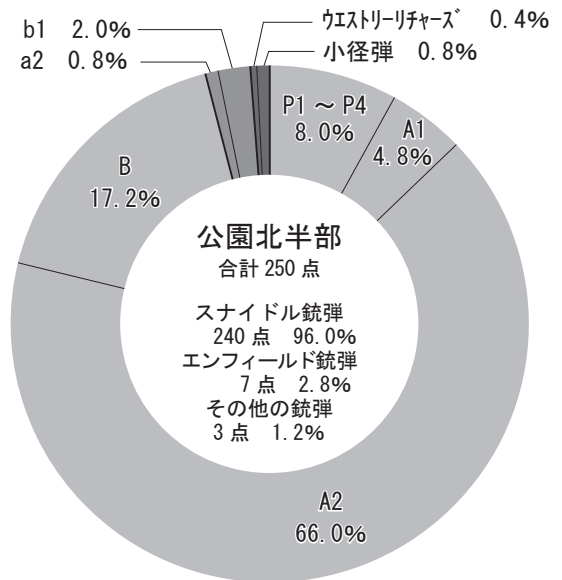
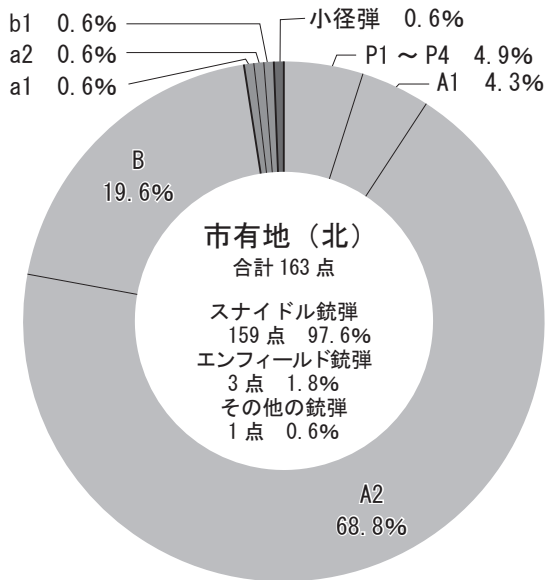
このことは田原坂の戦いのみならず、西南戦争全期中での両軍のスナイドル銃弾の製造と供給に関わり、生産地や製造法の違いなどにもつながる今後検討すべき課題である。戦争各期における各地での調査成果が鍵を握っている。

調査地	スナイドル銃弾								エンフィールド銃弾				その他の銃弾							合計
	P1	P2	P3	P4	A1	A2	B	小計	a1	a2	b1	小計	スバンサー	ジャブス	ウェストリ-リリース	ヘンリー	小径弾	弾種不明	合計	
北平古道	0	1	2	29	4	130	24	190	0	2	4	6	0	0	0	0	2	0	2	198
田原城跡・寺跡	1	1	0	11	14	139	39	205	0	0	2	2	0	0	0	0	2	0	2	209
熊野座神社	0	1	2	10	18	466	91	588	5	8	21	34	2	0	3	0	0	0	5	627
みかん小屋周辺	0	0	1	3	6	96	23	129	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	1	131
本道二ノ坂	0	2	8	14	28	539	353	944	12	102	240	354	19	8	10	1	9	2	49	1347
集中部	(0)	(2)	(2)	(10)	(11)	(253)	(72)	(350)	(1)	(3)	(4)	(8)	(3)	(1)	(0)	(0)	(3)	(0)	(7)	(365)
集中部以外	(0)	(0)	(6)	(4)	(17)	(286)	(281)	(594)	(11)	(99)	(236)	(346)	(16)	(7)	(10)	(1)	(6)	(2)	(42)	(982)
谷村計介碑	0	1	1	2	8	66	43	121	0	1	3	4	0	0	0	0	2	0	2	127
市有地(北)	0	0	0	8	7	112	32	159	1	1	1	3	0	0	0	0	1	0	1	163
市有地(南)	0	0	0	0	0	7	2	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
公園北半部	0	1	3	16	12	165	43	240	0	2	5	7	0	0	1	0	2	0	3	250
公園南半部	0	0	0	1	0	5	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
資料館下	0	0	0	0	0	2	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
岡林遺跡	0	0	0	0	0	2	1	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	4
舟底遺跡	0	1	0	6	2	39	15	63	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	64
合計	1	8	17	100	99	1768	668	2661	18	116	278	412	21	9	14	1	19	2	66	3139

調査地毎の小銃弾の分類一覧表



第 3 図 調査地毎の小銃弾の種類と比率

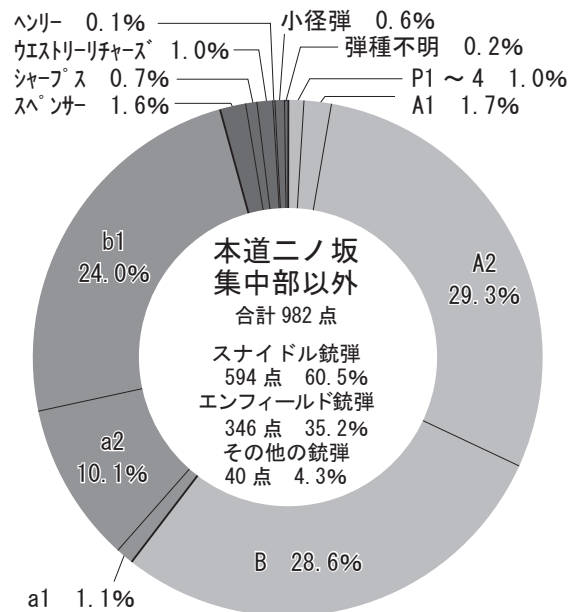
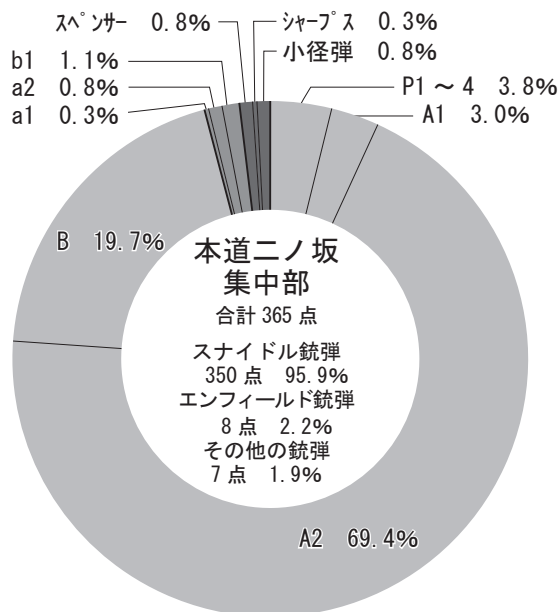


■ スナイドル銃弾  
■ エンフィールド銃弾  
■ その他の銃弾

注記

- ・ 掲示した円グラフは分類可能なスナイドル銃弾の P1・P2・P3・P4・A1・A2・B タイプ、エンフィールド銃弾の a1・a2・b1 タイプ、その他の銃弾のスパンサー銃弾、シャープス銃弾、ウエストリーリチャーズ銃弾、ヘンリー銃弾、小径弾の合計数を基に作成した。
- ・ スナイドル銃弾のうち A1 か A2 か判別できない A1/2、A か B か判別できない A/B、エンフィールド銃弾のうち a1 か a2 か b1 か判別できない c、及び小片の 4 種類は分類できないのでグラフ化していない。
- ・ 調査地のうち市有地 (南)、公園南半部、資料館下、岡林遺跡は出土数が少ないためグラフ化していない。

調査地毎の小銃弾の種類と比率



第 4 図 本道二ノ坂調査地小銃弾の種類と比率

圧入栓（第5図）

圧入栓はエンフィールド銃弾は木栓が多数で、スナイドル銃弾は両方がある。比率は古式Pタイプ陶栓15.4%・木栓84.6%、A1タイプ陶栓90.4%・木栓9.6%、A2タイプ陶栓99.3%・木栓0.7%、新式Bタイプ陶栓86.2%・木栓13.8%。圧入栓からみても、Pタイプはエンフィールド銃弾の延長上にあり、A1タイプの出現は銃弾構造変化だけでなく圧入栓材質も変化する大きな画期である。推定外国産A2は陶栓で、推定国内産Bは両方で木栓の比率が高い。重さは陶栓0.8～0.9g、木栓0.3～0.4gである。

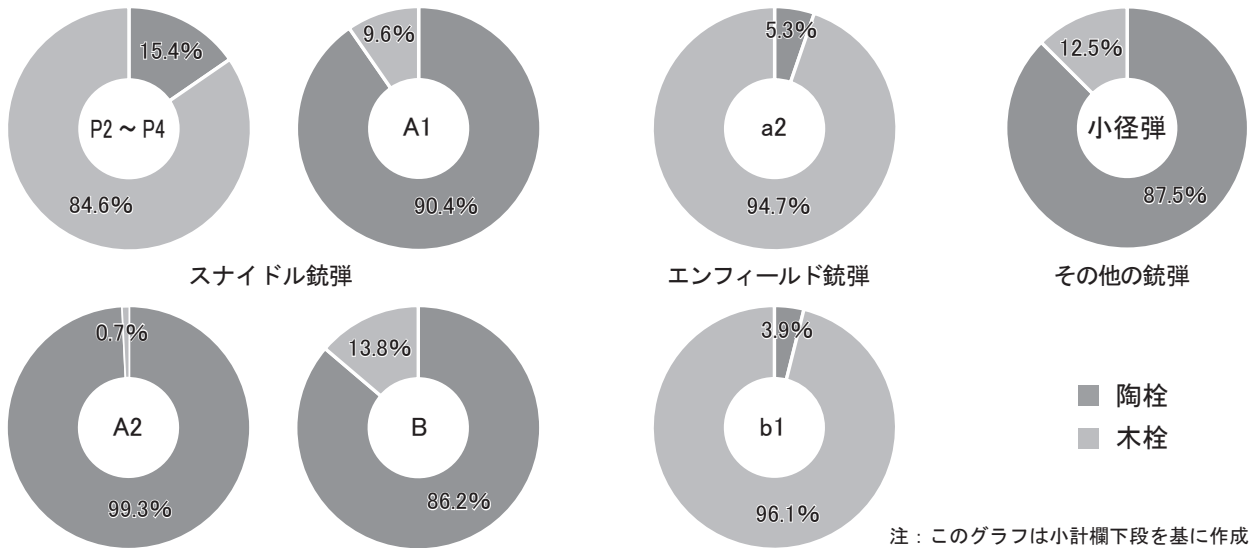
圧入栓は新旧銃弾の変化と連動して、木栓から陶栓へ変化するように見える。ただ、木栓はBタイプで復活する。Bタイプ銃弾の図示がある『火工教程』第一篇第六門小銃弾薬ノ部スナイドル弾薬調整には、概論に「鉛丸ハ鉛ヲ以テ搾製シ（中略）圓臺孔ヲ穿チ爰ニ木栓ヲ挿入ス（後略）」との記述があり、この時期の国産品には木栓が使用されていたことがわかる。

圧入栓の変化は新旧の時期的変遷だけでなく、産地の相違をも敏感に映すと考えられ、外国および国内の軍事工業生産と材料調達やその加工技術、製品斉一性や精度重視の思考の相違が、木栓から陶栓へ、次いで木栓に変化する要因の一つと考えられる。

調査地/種別	スナイドル銃弾										エンフィールド銃弾					
	P2~P4		A1		A2		B		A	スナイドル 小計	a2		b1		c	エンフィールド 小計
	陶栓 (15.4%)	木栓 (84.5%)	陶栓 (90.4%)	木栓 (9.6%)	陶栓 (99.3%)	木栓 (0.7%)	陶栓 (86.2%)	木栓 (13.8%)			陶栓 (5.3%)	木栓 (94.7%)	陶栓 (3.9%)	木栓 (96.1%)		
北平古道	陶栓	—	2 (2.7%)	66 (89.2%)	6 (8.1%)	—	74	—	—	—	—	—	0			
	木栓	2 (66.7%)	—	1 (33.3%)	—	—	3	—	—	1 (100.0%)	—	—	1			
田原城跡・寺跡	陶栓	1 (1.3%)	6 (7.7%)	60 (76.9%)	11 (14.1%)	—	78	—	—	—	—	—	0			
	木栓	1 (33.3%)	1 (33.3%)	—	1 (33.3%)	—	3	—	—	—	—	—	0			
熊野座神社	陶栓	1 (0.4%)	10 (3.8%)	222 (83.5%)	30 (11.3%)	3 (1.1%)	266	—	—	1 (50.0%)	1 (50.0%)	2				
	木栓	1 (9.1%)	1 (9.1%)	2 (18.2%)	7 (63.6%)	—	11	—	—	5 (100.0%)	—	—	5			
みかん小屋周辺	陶栓	—	3 (5.3%)	50 (87.7%)	4 (7.0%)	—	57	—	—	—	—	—	0			
	木栓	—	—	1 (33.3%)	2 (66.7%)	—	3	—	—	—	—	—	0			
本道二ノ坂	陶栓	—	10 (2.7%)	233 (62.9%)	125 (33.6%)	3 (0.8%)	371	—	—	2 (100.0%)	—	—	2			
	木栓	5 (20.0%)	3 (12.0%)	1 (4.0%)	16 (64.0%)	—	25	17 (20.2%)	67 (79.8%)	—	—	—	84			
谷村計介碑	陶栓	—	3 (5.7%)	36 (67.9%)	14 (26.4%)	—	53	1 (5.3%)	—	—	—	—	1			
	木栓	—	—	—	3 (100.0%)	—	3	—	—	—	—	—	0			
市有地(北)	陶栓	—	3 (6.1%)	40 (81.6%)	6 (12.2%)	—	49	—	—	—	—	—	0			
	木栓	1 (33.3%)	—	—	2 (66.7%)	—	3	—	—	—	—	—	0			
市有地(南)	陶栓	—	—	2 (100.0%)	—	—	2	—	—	—	—	—	0			
	木栓	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	0			
公園北半部	陶栓	—	9 (8.4%)	83 (77.6%)	15 (14.0%)	—	107	—	—	—	—	—	0			
	木栓	1 (20.0%)	—	1 (20.0%)	2 (40.0%)	1 (20.0%)	5	1 (33.3%)	2 (66.7%)	—	—	—	3			
公園南半部	陶栓	—	—	2 (0.2%)	—	—	2	—	—	—	—	—	0			
	木栓	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	0			
岡林遺跡	陶栓	—	—	1 (100.0%)	—	—	1	—	—	—	—	—	0			
	木栓	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	0			
舟底遺跡確認調査	陶栓	—	—	13 (86.7%)	2 (13.3%)	—	15	—	—	—	—	—	0			
	木栓	—	—	—	1 (100.0%)	—	1	—	—	—	—	—	0			
小計	陶栓	2 (0.2%)	46 (4.3%)	808 (75.6%)	213 (19.9%)	6	1075	1 (25.0%)	3 (75.0%)	1	—	5				
	木栓	11 (19.6%)	5 (8.9%)	6 (10.7%)	34 (60.8%)	1	57	18 (19.4%)	75 (80.6%)	0	—	93				
合計	13 (1.2%)	51 (4.5%)	814 (72.4%)	247 (21.9%)	7	1137	19 (100.0%)	78 (80.4%)	1	—	98					

注：調査地欄の(%)は銃弾タイプ毎の割合。小計欄の上段の(%)は調査地毎の割合。下段の(%)は銃弾タイプ毎の割合

調査地毎の出土圧入栓一覧表

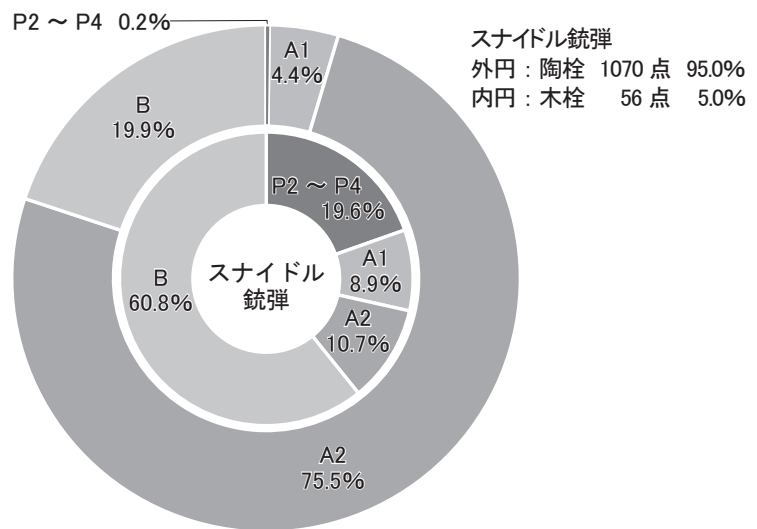


注：このグラフは小計欄下段を基に作成

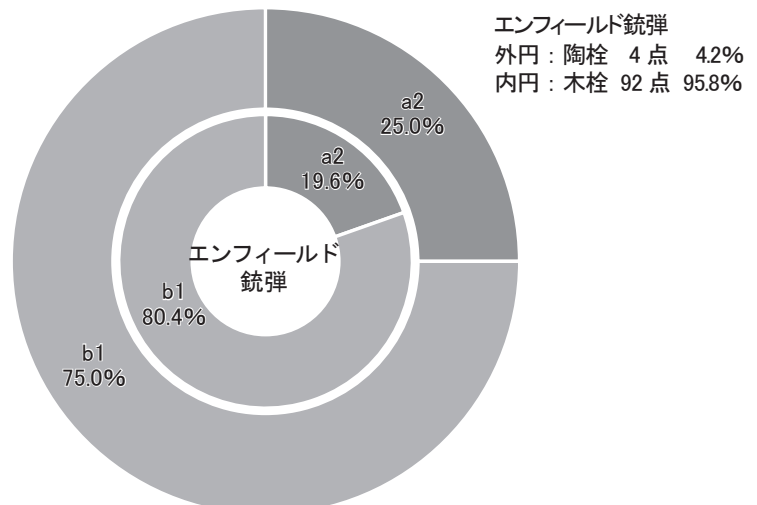
銃弾の分類毎の圧入栓の割合

(単位：点)

その他の銃弾			計	合計
小径弾	小径弾小計			
陶栓 (75.0%)	木栓 (25.0%)			
1 (100.0%)	1	75	79	
—	0	4		
2 (100.0%)	2	80	83	
—	0	3		
—	0	268	284	
—	0	16		
1 (100.0%)	1	58	61	
—	0	3		
2 (100.0%)	2	375	485	
1 (100.0%)	1	110		
1 (100.0%)	1	55	58	
—	0	3		
—	0	49	52	
—	0	3		
—	0	2	2	
—	0	0		
—	0	107	115	
—	0	8		
—	0	2	2	
—	0	0		
—	0	15	16	
—	0	1		
—	0	1	1	
—	0	0		
7 (100.0%)	7	1087	1238	
1 (100.0%)	1	151		
8 (100.0%)	8	1238		



スナイドル銃弾  
外円：陶栓 1070点 95.0%  
内円：木栓 56点 5.0%



エンフィールド銃弾  
外円：陶栓 4点 4.2%  
内円：木栓 92点 95.8%

注：スナイドル銃弾はP2～P4、A1、A2、B、エンフィールド銃弾はa2、b1をグラフ化した。スナイドル銃弾のP1、エンフィールド銃弾のcは出土数が少ないためグラフ化していない。

第5図 圧入栓のタイプ毎の割合

### (3) 田原坂戦の銃砲弾の消費数

#### 3-1 小銃弾 (第7図)

ここでは、主用されたスナイドル銃弾について記す。川口武定著『従征日記』巻一には、スナイドル銃弾の受払表が記載されている。3月3日から13日までの分で田原坂の戦いの全期間中のものではないが、戦闘現場での具体的な消費弾薬数を知ることができる。

表は、3月13日の項の「明治十年三月自三日至十三日第一第二旅団スナイドル弾薬受払表」をもとに作成した。この段階では各日とも残数は少なくやり繰りは綱渡りの状況で、担当者の焦燥が伝わってくるような数字である。なお、この元表は『征西戦記稿附録』「第一旅団会計官日記抄上」にも記載がある。

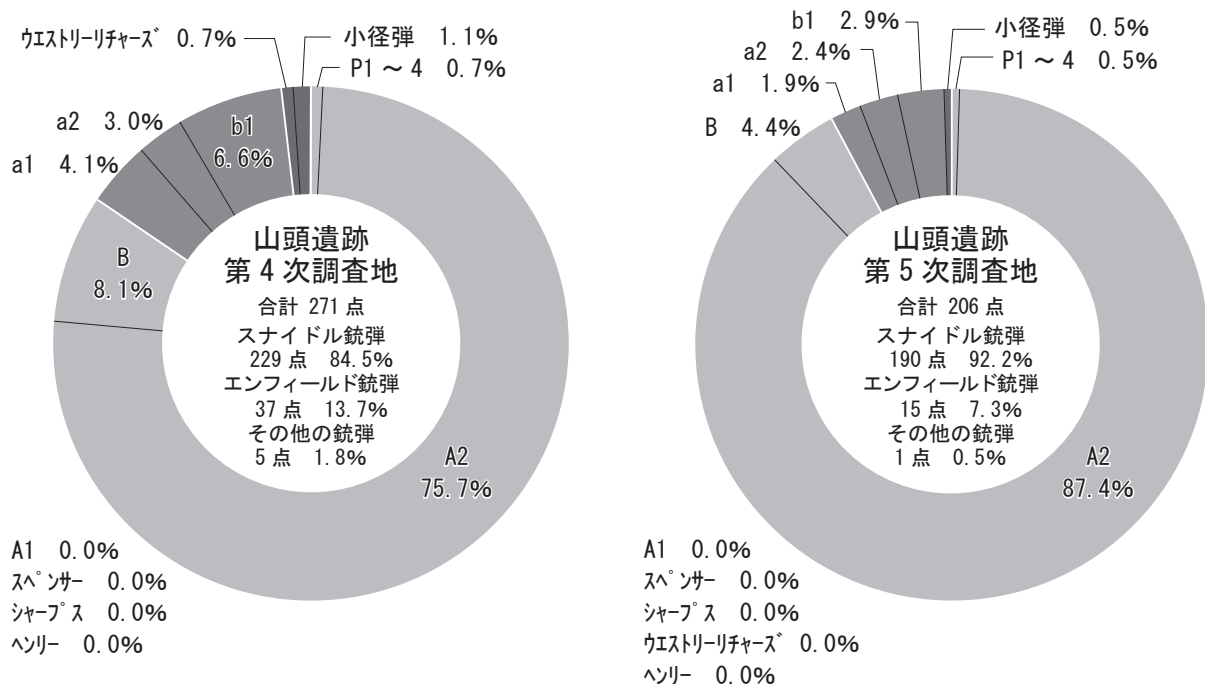
本表によると、3月3日から13日までの11日間にスナイドル銃弾1,482,080発が払い出されており、1日平均134,700発余りとなる。この数は前述した『征西戦記稿』巻二十四「弾薬消費」の「砲廠ノ計算書ニ拠ルニ田原坂ノ初戦ヨリ之ヲ抜クニ及ブマデ正面軍ノ費ス所、一日平均凡ソ三十二万二千五百五十発」と比較すると少ない。

なお、この322,150発はすべてがスナイドル銃弾ではなく、ほかの各種の小銃弾や大砲弾も含まれていると考えられるので、スナイドル銃弾の実数はわからない。しかし、『征西戦記稿附表全』の「従明治十年二月廿四日開戦至全年九月廿四日鎮定弾薬消耗表」には南関砲廠の小銃弾として合計19,246,947発、内訳はスナイドル実包17,952,601発・93.3%、マルチネー実包820発・0%、ツンナール実包634,000発・3.3%、スペンサー実包97,206発・0.5%、スタール実包97,292発・0.5%、エンフィールド実包465,028発・2.4%が記載されていて各銃弾の消費数と比率が判明し、圧倒的にスナイドル銃弾が多いことがわかる。

山頭遺跡調査地毎の出土小銃弾の分類一覧表

調査地	スナイドル銃弾					エンフィールド銃弾				その他の銃弾							総計
	P1~4	A1	A2	B	小計	a1	a2	b1	小計	スペンサー	シャープス	ウエストリーリチャーズ	ハンリー	小径弾	弾種不明	合計	
山頭遺跡 第4次調査地	2	0	205	22	229	11	8	18	37	0	0	2	0	3	0	5	271
山頭遺跡 第5次調査地	1	0	180	9	190	4	5	6	15	0	0	0	0	1	0	1	206
合計	3	0	385	31	419	15	13	24	52	0	0	2	0	4	0	6	477

※小片は除く



第6図 山頭遺跡における調査地毎の小銃弾の種類と比率

小銃弾と大砲弾の南関砲廠の合計は19,288,477発、各々の割合は99.8%と0.2%で、消耗弾薬全体でのスナイドル実包の割合は93.1%を占める。本附表備考には「南関砲廠ノ区画ハ熊本城連絡ニ至ルマテ第一、第二、第三旅団ノ消耗数ナリ」とあり、そのまま熊本県玉名、山鹿、植木など県北部地域での3個旅団の49日間の戦闘に使用された小銃弾であることを示している。ただし、熊本県北部地域ではこの3個旅団のほかにも、第四旅団や警視隊も投入されているので、実数はさらに増加すると思われる。

この場合、田原坂の戦いで消費された弾薬1日平均322,150発の93.1%≒30万発、17日間では322,150発×17日間=5,476,550発の93.1%≒510万発ほどがスナイドル銃弾となる。さらに仮数を重ねると、3月3日～13日の11日間は平均134,700発余り、4日～20日の17日間の平均が30万発ほどであれば、田原坂の戦い後半の14日～20日の7日間のスナイドル銃弾は、510万発から148万発を差し引いた362万発となり、1日平均52万発弱となる。この後半7日間のうちには休戦日もあるので、1日当たりの消費数は実際には平均数を上回る数になると考えられる。

実際に同14日頃には45万発ほどが田原口で消費され、山鹿口でも同様に多数と、高瀬の山縣有朋参軍から鳥尾小弥太中将あて知らせている。また、16日の陸軍省第三局次長砲兵支廠関迪教中佐から同第一局次長滋野清彦中佐あての暗号電報でも「弾薬ハ戦地ニテ費ヤス数、一日六十万ナリト（長崎砲兵部）井上少佐ヨリ報知アリ」とある。この60万発は田原坂の戦いを中心とした熊本県北部地域での戦いで主にスナイドル銃弾のことを指すと考えられ、戦いの凄まじさを示す数字として、当時の銃弾製造担当者にとっては非常に重い数字であったことがうかがわれる。これらの記録なども含めて、田原坂の戦い後半はスナイドル銃弾を主とした小銃弾の消費が極めて多い戦いであったことが推定できる。

1日平均消費数スナイドル銃弾52万発弱、全弾種も含めると約55万4千発、あるいは60万発という数字は、一見度を越しているようにもみえる。だが、『征西戦記稿』卷十七正面軍戦記三十一の4月8日荻迫木留方面の戦闘の「弾薬ヲ費ス五十四万九千二百発、一二日ク五十八万発ノ多キニ至ル」との記述があるので、大きな誤りではないと思われる。

これらから考えられることは、田原坂の戦いにおける銃弾消費が非常に甚だしかった大激戦は、戦いの

明治十年三月 自三日至十三日 第一第二旅団スナイドル弾薬受払表

(単位：発)

日付	受数			払数			当日残数
	受入	前日残数	計	本街道	二俣口	計	
3月3日	137,000		137,000	72,000		72,000	65,000
同4日	96,000	65,000	161,000	86,000		86,000	75,000
同5日	206,000	75,000	281,000	128,000		128,000	153,000
同6日	49,760	153,000	202,760	110,500	63,000	173,500	29,260
同7日	325,000	29,260	354,260	81,000	106,000	187,000	167,260
同8日	194,000	167,260	361,260	50,000	63,000	113,000	248,260
同9日	172,520	248,260	420,780	50,880	119,600	170,480	250,300
同10日		250,300	250,300	23,000	38,000	61,000	189,300
同11日	139,200	189,300	328,500	12,000	186,100	198,100	130,400
同12日	270,000	130,400	400,400	50,000	203,000	253,000	147,400
同13日		147,400	147,400		40,000	40,000	107,400
計	1,589,480			663,380	818,700	1,482,080	
備考	3月3日の払数、本街道72,000発は安楽寺下村において射費した。 同9日の払数、二俣口119,600発のうち1万発は原倉村に分配した。						

全期間ではなく、弾薬供給が進み始めた14日以降の後半7日間であり、これが多くの人々の記憶として後世に伝えられたと思われる。

### 第三旅団の戦いについて

『征西戦記稿』巻二十正面軍戦記十二の4月15日には「第一、二両旅団兵、二月二十六日開戦以来本日ニ至ルマデ四十九日間、砲兵第四大隊第二小隊発弾ノ数五千九百三十餘、又歩兵ノ費ス所小銃弾一日平均三十二万二千百五十発ノ多キニ至ル。其劇戦知ル可キナリ」とある。

1日平均数322,150発は同じだが、消費日数が巻二十は49日間、巻二十四は17日間である。全体の数量を1日平均数をもとに試算すると、巻二十では第一第二旅団の49日間×322,150発で1,579万発、巻二十四では同17日間で548万発である。前述した『征西戦記稿附表全』南関砲廠の数は3個旅団の49日間の合計数で19,246,947発なので、差し引くと第三旅団は1,925万発－1,579万発＝346万発となり、他旅団の半分程度の消費量になる。

第三旅団は3月10日から山鹿口方面に着しているのので、37日間で346万発一日平均10万発弱となる。この時期の他地域、他旅団と比べれば少ないようにみえるが、この数字は全体的に見ればかなり多いほうであり、田原坂の戦いの前半に匹敵する激戦が、山鹿口や合志方面などでくりひろげられたことがわかる。

#### 3-2 大砲弾（第7図）

「元第貳旅団砲兵第四大隊第二小隊出征中發消弾数取調表」（以下、砲四大二小取調表という）によると、3月11日より20日までの10日間の二俣と田原坂での消費数は、第二小隊右分隊で四斤山砲榴弾893発・同榴霰弾87発・同霰弾1発の小計981発、同中央分隊で四斤山砲榴弾885発・同榴霰弾7発の小計892発、同左分隊で四斤山砲榴弾991発・同榴霰弾7発の小計998発、合計は四斤山砲榴弾2,769発・同榴霰弾101発・同霰弾1発の合計2,874発だが、これには12ドイム臼砲榴弾も3発含まれている。

1日当たりの弾数は全体で287発、内訳は四斤山砲榴弾277発・同榴霰弾10発・同霰弾0.1発である。この後の4月14日の熊本城解放まででは1日当たり123発、熊本城解放後の熊本市東部健軍御船方面での城東会戦から薩摩軍解隊布告頃の8月18日まででは同11発、9月の鹿児島城山終戦まででは同92発である。

1日当たりで計算すれば計513発のうち田原坂の戦い55.9%、熊本城解放まで24.0%、4月中頃から8月は2.2%、9月の鹿児島方面の戦闘17.9%である。砲弾数をみても田原坂の戦いは他よりも圧倒的に多量の砲弾が使用されていたことがわかる。本資料は一砲隊小隊の記録ながら、激しい戦いの一端をよく示している。

『征西戦記稿』巻二十正面軍戦記二十四月十五日には、「第一、二両旅団兵、二月二十六日開戦以来本日に至るまで49日間、砲兵第四大隊第二小隊発弾の数5,930餘、又歩兵の費す所小銃弾一日平均322,150発の多きに至る。其劇戦知る可きナリ」の記述がある。この「5,930餘」は田原坂戦から熊本城開城までの2,874発＋3,064発＝5,938発のことだと思われる。

また、前述した『征西戦記稿附表全』「従明治十年二月廿四日開戦至全年九月廿四日鎮定弾薬消耗表」では南関砲廠の大砲弾は合計41,530発、内訳は四斤山砲弾薬35,632発・85.7%、四斤野砲弾薬1,350発、3.3%、ブロードウェル砲弾薬3,010発・7.2%、12ドイム臼砲弾薬526発・1.3%、13ドイム臼砲弾薬530発・1.3%、20ドイム臼砲弾薬482発・1.2%である。

南関砲廠の49日間を1日当たりで計算すると、合計848発、内訳は四斤山砲弾薬727発、四斤野砲弾薬28発、ブロードウェル砲弾薬61発、12ドイム臼砲弾薬11発、13ドイム臼砲弾薬11発、20ドイム臼砲弾薬10発となる。砲四大二小取調表では1日当たりの四斤山砲弾は287発＋122発＝409発なので、田原坂の戦いと熊本城解放までだと7割と3割の比率となる。南関砲廠の3個旅団合計の四斤山砲弾薬727発のうち第二旅団砲兵第四大隊第二小隊の1個小隊だけで56.3%を占める計算になる。

四斤山砲榴弾片、榴霰弾片と鉛弾子は多くの調査地から採集・出土している。しかし、霰弾片と鉄弾子は確認がない。砲四大二小取調表でも発消員数は少なく、加えて山砲霰弾は『兵器沿革史』第一輯によると600m以下の距離で使用するものだが、田原坂のように両軍の陣地が近接し地形的にも平坦な場所が少なく、仰攻が必要な場所では使用しにくかったためかもしれない。

### 3-3 平均消費数からみた田原坂の戦い

前項までの検討で、田原坂の戦いの消費数は小銃弾全体で一日平均322,150発、スナイドル銃弾は前半13日までは134,700発、後半は52万発である。スナイドル銃弾の消費量がきわめて多い。大砲弾も同様に各分隊で一日平均96発、小隊で287発である。1日当たりの消費数は他と比べて圧倒的に多い。

戦闘時間を日の出日の入間の12時間とすると、1時間当たり小銃弾26,850発、10分間に4,500発ほ

元第二旅団砲兵第四大隊第二小隊出征中発消弾数取調表 (単位：発)

隊	弾種	田原坂の戦い 3月11日～20日 二俣及び田原坂に おいて発消(10日 間)		田原坂の戦い後～ 熊本城開城 3月21日～4月14 日 植木滴水木留及び 味取等において発 消(25日間)		可愛岳の戦いまで 4月20日～8月18 日 枯木吉松越稲葉崎 「フゾハ」高原高岡 佐土原高鍋田/原此 ノ谷及び江ノ嶽等に おいて発消(121日 間)		鹿児島での戦い 9月1日～24日 鹿児島において発 消(24日間)		3月11日出戦以来 鹿児島に至り9月 24日平定までの間 総発消弾数(180 日間)	
		発消員数	1日当り	発消員数	1日当り	発消員数	1日当り	発消員数	1日当り	発消員数	1日当り
右分隊	四斤山砲榴弾	893	89	1,407	56	384	3	726	30	3,410	18.9
	同榴霰弾	87	9	17	1	24	0.2	78	3	206	1.1
	同霰弾	1	0.1							1	0.0
	四斤野砲榴弾							305	13	305	1.7
	同榴霰弾							10	0.4	10	0.1
	クラブ野砲榴弾							109	5	109	0.6
	計	981	98	1,424	57	408	3	1,228	51	4,041	22.5
中央分隊	四斤山砲榴弾	885	89	784	31	196	2	120	5	1,985	11.0
	同榴霰弾	7	0.7	8	0.3	6	0.05	6	0.3	27	0.2
	四斤野砲榴弾							171	7	171	1.0
	同榴霰弾							9	0.4	9	0.1
	二十拇白砲榴弾							68	3	68	0.4
	同焼弾							22	1	22	0.1
	計	892	90	792	31	202	2	396	17	2,282	12.7
左分隊	四斤山砲榴弾	991	99	815	33	685	6	449	19	2,940	16.3
	同榴霰弾	7	0.7			8	0.1	37	2	52	0.3
	四斤野砲榴弾							46	2	46	0.3
	二十拇白砲榴弾							52	2	52	0.3
	同焼弾							7	0.3	7	0.0
		計	998	100	815	33	693	6	591	25	3,097
小隊の 発消 数	四斤山砲榴弾	2,769	277	3,006	120	1,265	11	1,295	54	8,335	46.3
	同榴霰弾	101	10	25	1	38	0.3	121	5	285	1.6
	同霰弾	1	0.1							1	0.0
	四斤野砲榴弾							522	22	522	2.9
	同榴霰弾							19	1	19	0.1
	クラブ野砲榴弾							109	5	109	0.6
	二十拇白砲榴弾							120	5	120	0.7
	同焼弾							29	1	29	0.2
		小計	2,871	287	3,031	121	1,303	11	2,215	93	9,420
	十二拇白砲榴弾	3	0.3	33	1					36	0.2
	合計	2,874	287	3,064	122	1,303	11	2,215	93	9,456	52.5

外にスタール実包1,542個、ピストル実包93個、スナイドル実包573個発消

砲兵第四大隊第二小隊附 陸軍火工下長高栗 誠

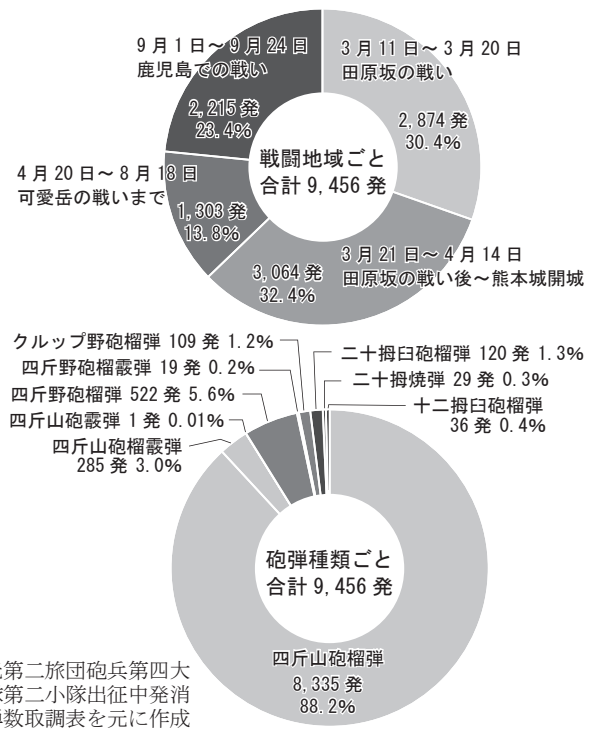
※「元第二旅団砲兵第四大隊第二小隊出征中発消弾数取調表」を基に作成した。

ど、1日60万発とすると1時間50,000発、10分間8,330発ほどとなり、大砲弾は24発である。こうした数字が示す状況が人口に膾炙して激戦の様子を伝えることとなり、松木や電柱が蜂巢のようだったとのお話等の信ぴょう性を裏付けることにもつながる。

582頁の調査地単位面積当たりの数は平面値で、上記の数字は時間値である。これらを組み合わせれば、より立体的な戦闘状況が浮かび上がるのではないかと考えられる。

#### (4) 田原坂調査地小銃弾の運送

田原坂調査地の小銃弾は、文献調査の成果としてその多くが砲兵本廠から供給されたと考えられる。本廠から九州までは船送である。砲兵本廠は東京都文京区小石川の旧水戸藩邸（現後樂園一帯）に置かれ、銃砲弾は神田川から隅田川を通過して横浜まで舟



元第二旅団砲兵第四大隊第二小隊出征中発消費弾数取調表を元に作成

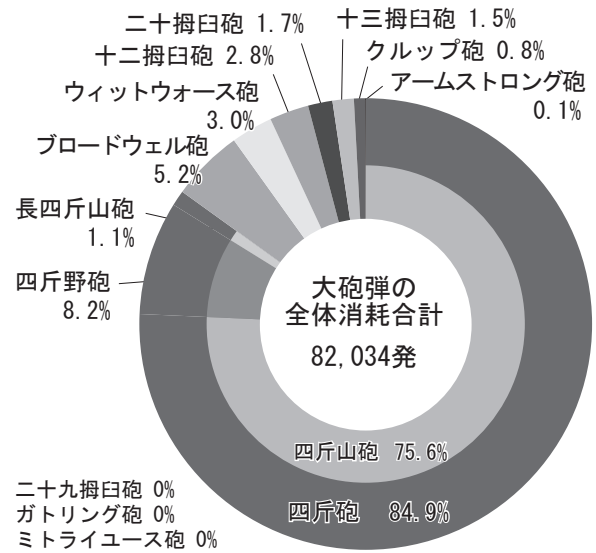
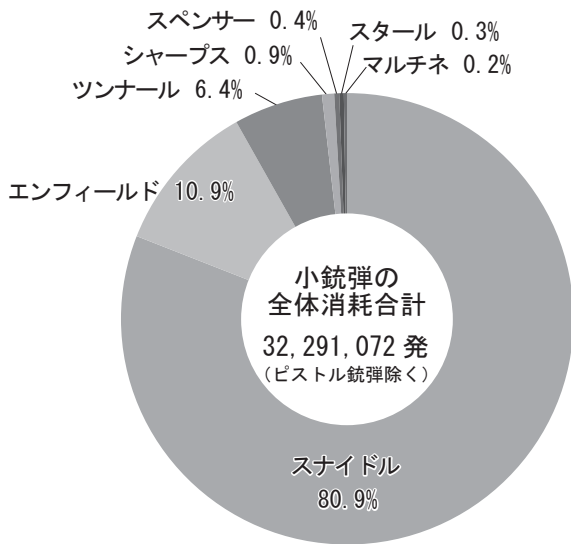
小銃弾 『征西戦記稿附表全』弾薬消耗表より作成（単位：発）

種類	受数	南関砲廠	第一	第二	第三	第四	別働第一	別働第二	別働第三	熊本鎮台	新選旅団	別種	合計
スナイデル銃	34,632,830	17,952,601	324,310	652,900	725,407	1,176,390	577,900	1,335,434	1,517,050	1,707,326	77,500	98,220	26,145,038
エンフィールド銃	19,530,850	465,028	44,400	119,220	0	0	0	1,000	1,755,910	572,000	556,222	0	3,513,780
ツンナール銃	3,530,250	634,000	91,800	0	0	322,850	4,000	1,002,081	0	0	0	0	2,054,731
シャープス銃	1,153,680	0	0	0	0	0	0	0	500	280,000	0	0	280,500
スペンサー銃	1,563,326	97,206	3,028	0	0	1,000	4,500	0	7,048	2,350	0	0	115,132
スタール銃	537,264	97,292	0	0	0	0	0	56	6,700	0	0	0	104,048
マルチネー銃	2,280,528	820	0	52,400	0	1,180	1,210	22,233	0	0	0	0	77,843
レカルツ銃	65,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ピストル銃	27,159	19,702	89	60	0	938	436	0	46,743	4,052	300	0	72,320
計	63,320,887	19,266,649	463,627	824,580	725,407	1,502,358	588,046	2,360,804	3,333,951	2,565,728	634,022	98,220	32,363,392

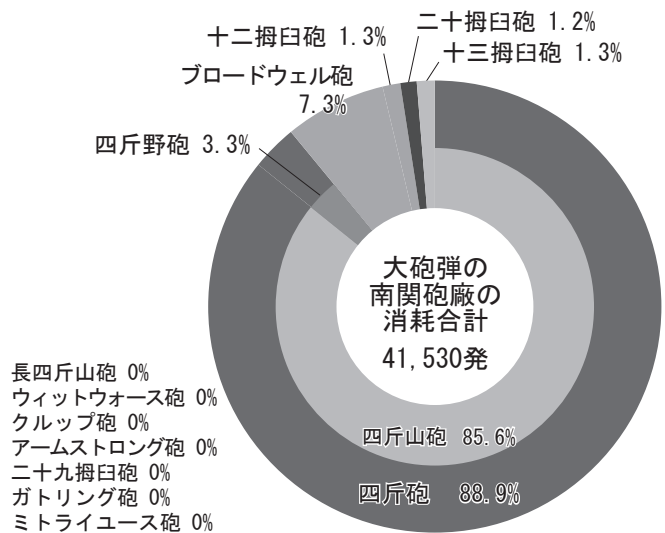
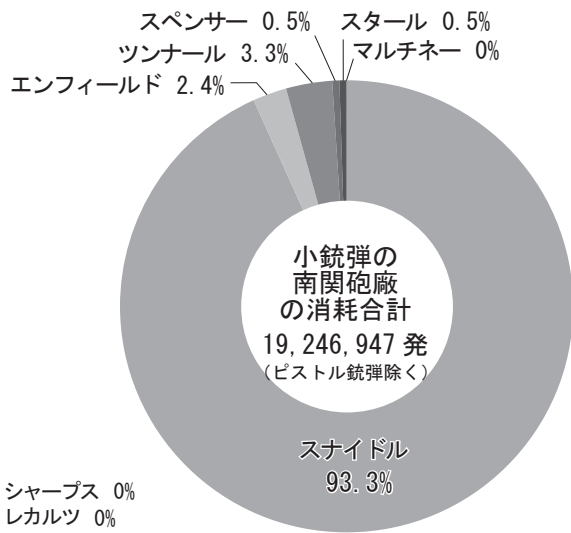
#### 大砲弾

種類	受数	南関砲廠	第一	第二	第三	第四	別働第一	別働第二	別働第三	熊本鎮台	新選旅団	別種	合計
四斤山砲	67,166	35,632	2,320	2,853	5,994	3,415	1,347	2,659	95	6,599	1,190	0	62,104
四斤野砲	1,000	1,350	0	576	0	909	648	0	0	3,203	0	0	6,686
長四斤山砲	326	0	0	0	0	0	0	0	905	0	0	0	905
ブロードウェル砲	6,300	3,010	0	0	0	414	136	673	0	0	0	0	4,233
ウィットウォース砲	2,439	0	0	0	0	0	0	2,439	0	0	0	0	2,439
十二擲臼砲	4,276	526	0	0	85	0	0	98	40	954	600	0	2,303
二十擲臼砲	2,786	482	0	154	0	0	0	121	0	650	0	24	1,431
十三擲臼砲	3,449	530	0	0	0	124	9	325	0	0	260	0	1,248
クルップ砲	6,499	0	1	114	0	485	7	35	0	0	0	0	642
アームストロング砲	300	0	0	0	0	0	0	43	0	0	0	0	43
二十九擲臼砲	190	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ガトリング砲	11,500	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ミトラユース砲	2,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	108,231	41,530	2,321	3,697	6,079	5,347	2,147	6,393	1,040	11,406	2,050	24	82,034

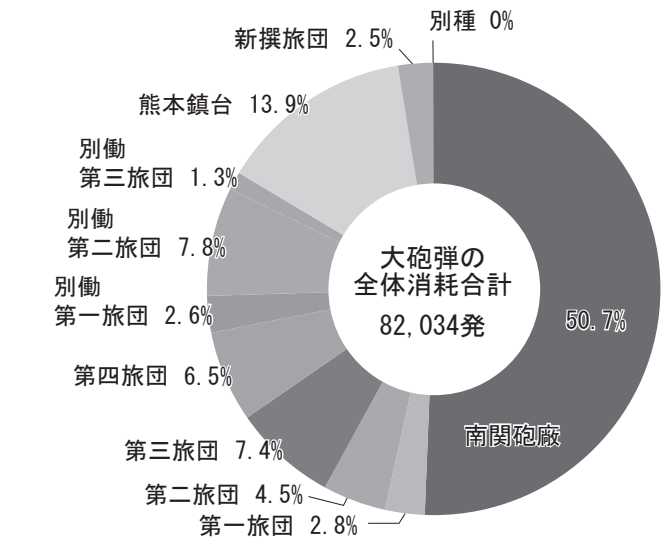
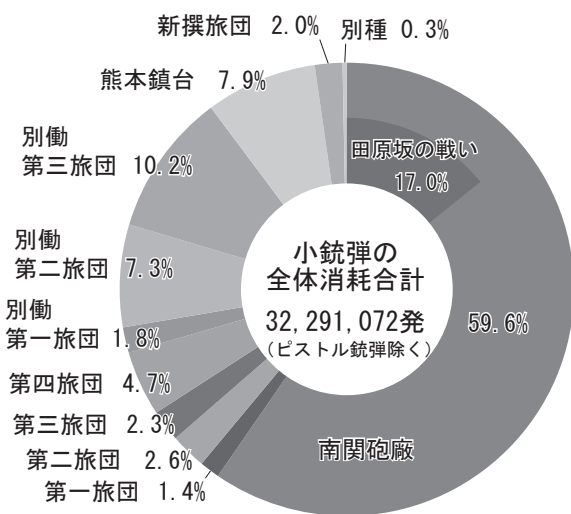
本表と右の円グラフは『征西戦記稿 附表 全』弾薬消耗表を基に作成



戦争全体における弾種毎の消費比率



南関砲廠の弾種毎の消費比率



第7図 西南戦争全体における旅団毎の消費比率

運で運ばれたとみられる。本廠では主に小銃の製造改造修理と弾薬の製造を担当していた。一方、砲兵支廠は大阪府大阪府中央区の大坂城東側にあり、青屋門を出た現大坂城ホール一帯にあった。支廠は主に大砲と弾薬生産を担当し、スナイドル銃弾の製造もおこなった。ここは後に規模が拡大されて大阪砲兵工廠になる。銃砲弾は安治川から大阪湾に出て神戸に向かったと考えられる。

本廠から戦地前線の田原坂に届くまで、『西南戦役運輸誌』によると船送で概ね横浜神戸が2日、神戸博多が2日、のち陸送で早ければ5日程度である。田原坂資料館資料には「スナイドル実包四百四拾發砲兵支廠」の蓋面墨書弾薬箱があり、支廠貯蔵分も戦地に持ち込まれていた可能性がある。ただ、支廠の新規製造分は、田原坂の戦いに使用されたとしても少数だろう。

第一旅団会計部長川口武定著『従征日記』2月28日「弾薬スナイドル銃包ハ箱ニ入レ、五百發四百五六十發ナルモノアリヲ一箱トシ」「又、布囊ニ入レ、二百發ヲ一囊トシ」の記載では、運送のための弾薬箱には数種類があり、布袋もあったことがわかる。

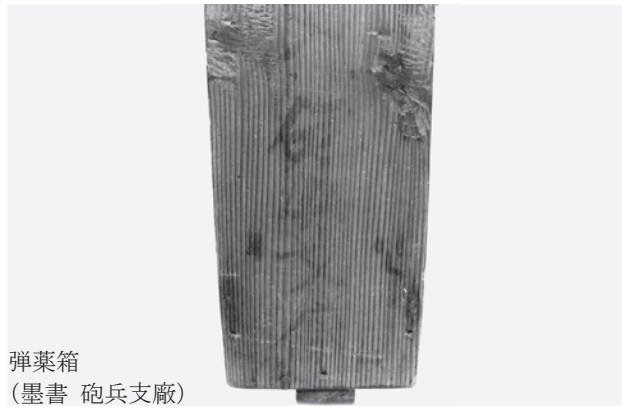
### 弾薬の運輸 『西南戦役運輸誌』郵便汽船三菱会社社史第五号附録より作成

船名	月日	発港	月日	着港	弾薬数		備考
					箱数	弾数(発)	
[開戦前 明治9年12月～明治10年2月18日]							
社寮丸	2月15日後12	横浜	2月17日後12	神戸	70	35,000	小計 35,000
[開戦後 2月19日～3月3日]							
西京丸	2月20日後3	横浜	2月21日後11	長崎	300	150,000	250箱(警)、50箱(海)
扶桑丸	2月20日	横浜		神戸	50	25,000	
品川丸	2月23日前10	横浜	2月25日後12	神戸	—	1,000,000	
玄海丸	2月25日	品川	2月25日	横浜	—	1,200,000	
名護屋丸	2月26日後7	横浜		神戸	720	360,000	
豊島丸	2月28日	品川		横浜	700	350,000	小計 3,169,000
廣嶋丸	3月3日	横浜		長崎	168	84,000	累計 3,204,000
[田原坂の戦い 3月4日～3月20日]							
瓊浦丸	3月9日	横浜	3月11日後6	神戸	500	250,000	500発となっていたが箱として算出した
東京丸	3月10日後10	横浜	3月	神戸	609	304,500	(陸)
敦賀丸	3月16日後6	横浜		長崎	4,100	2,050,000	
西京丸	3月18日後4	横浜	3月	長崎	400	200,000	
コレヤ号	3月18日後10:20	横浜	3月21日前10	神戸	72	36,000	小計 4,390,500
豊島丸	3月19日	品川		横浜	3,100	1,550,000	累計 7,594,500
[田原坂の戦い後 熊本城開城前まで 3月21日～4月15日]							
青龍丸	3月26日後9	横浜		博多	8,322	4,161,000	
九州丸	4月2日	神戸		肥後	334	167,000	
廣嶋丸	4月4日	横浜		長崎	—	6,057,000	
東海丸	4月7日後4	横浜		神戸	—	6,333,000	
東京丸	4月8日後4	横浜	4月	神戸	—	1,887,400	小計 20,199,900
兵庫丸	4月12日	横浜	4月14日	神戸	3,189	1,594,500	累計 27,794,400
[熊本城開城後 5月まで 4月16日～5月]							
西京丸	4月16日後4	横浜	4月	長崎	—	320,000	32万発(警)、兵器弾薬被服5,731箱(陸)
愛宕丸	5月2日	神戸		長崎	—	300,000	(陸)
玄海丸	5月10日	神戸		長崎	121	60,500	
西京丸	5月12日正12	横浜	5月	長崎	—	100,000	(警)
玄龍丸	5月17日	横浜		神戸	—	150,000	警視局員乗客
名護屋丸	5月18日	横浜		神戸	—	800,000	
愛宕丸	5月19日後6	横浜		神戸	700	350,000	(陸)
瓊浦丸	5月23日後12	神戸		多度津	198	99,000	
東京丸	5月25日	横浜	5月	神戸	390	195,000	小計 2,374,500
総計					—	30,168,900	

※弾薬は、1箱500発入りとして計算した。



弾薬箱  
(墨書 スナイトル実包四百四拾發)



弾薬箱  
(墨書 砲兵支廠)

## (5) 小銃弾の破損変形状況にみる製造法の検討 (第8図・第9図)

小銃弾を観察して得られた知見をもとに、様々な破損変形から製造法を推定する。小銃弾の変形には大きく分けて着弾時変形と発砲時変形の2種類がある。着弾時変形は基本的に全種類の小銃弾にある。今回はスナイドル銃弾 A2 タイプの着弾時変形展延状態資料およびエンフィールド銃弾 a2 タイプの発砲時変形からそれぞれの製造法を検討する。

### 5-1 スナイドル銃弾 A2 タイプ (第8図)

スナイドル銃弾 A2 タイプの展延状態資料は比較的多い。他タイプに比べて著しい破損変形で、ほとんど原形をとどめないヒモ状展延状態や小銃弾の「開き」状態もある。この原因は A2 タイプの構造と製造法に大きくかかわると考え、観察を進めた。A2 タイプは構造的に弾頭空洞が大きな特徴で、対象に衝突した際に大きくつぶれて対象を毀損させるのが目的という。ここでは、管見では文献に見当たらない弾頭空洞のある銃弾の製造法を遺物から検討する。代表例を図示したが、他にも一定数は確認できる。

1～20 は破損変形度が小さいものから順に並べた。1 は下端面に合せ目がみえ、2 は外面に筋があり円台孔内部には一部剥離がある。3 は剥離が外面下部にあり、4 は剥離線が弾頭まで至る。5 は衝突の衝撃で弾頭部がひび割れ剥離し、6 では2本の合せ目が頭部から裾部まで至り中の剥離面が良く観察できる。7 も外面に合せ目、8 は外面の合せ目が少し浮き円台孔部分は弾外皮体から剥離している。9 は円台孔内部に一部剥離、10 はキノコ状潰れで弾体が剥離し2枚に見える。11 になると剥離が進み弾外皮体が大きく剥れている。12 はさらに進んだもので弾外皮体のみになり、円台孔部分がそっくり剥がれてなくなっている。13 は合わせ目がずれているもの、14 は弾外皮体が一部裂けて内部の円台孔部分が露出し、円台孔部分の外表面には細い縦条線が多くある。15 と 16 は円台孔部分がむき出しで弾外皮体が半分以上剥れ、15 は弾外皮体内面に、16 は円台孔部分外面に細縦条線が多くある。17 からは円台孔部分が脱落し、弾外皮体のみになったものである。17 にはまだ痕跡が残るが、18 は痕跡すらない。細縦条線はかろうじて観察できる。19 は裏返り、20 は 12 と同様に弾外皮体のみになってしかも板状である。

これらの銃弾にみる大きな特徴は内外面に剥離痕があることで、小銃弾の形状を留めるものでも展延状態のものでも観察できる。剥離面の細縦条線は圧着を確実にするための造作と思われ、これも特徴の一つである。展延状態資料は多くが次に述べる「巻き造」によると考えられ、ちぎれた小片も同様である。

**巻き造** 以上の破損変形状況の観察から一つの製造法が浮かび上がる。これを今回は仮に「巻き造」と称する。弾丸は鋳造と搾造の製造法が知られているが、これらとは異なる別の製造法の可能性がある。

「巻き造」は円台孔部分と弾外皮体部分の部品2点組み合わせの、2段階製造で弾頭空洞を造り出す製造法と推定される。円台孔部分は鋳造または搾造の1回造り、弾外皮体部分は板状または半円筒形で円台孔部分を組み合わせ、回転圧着して製造する2段階製造法が考えられる。圧着を確実にするため細縦条線を刻んでおく。他には部品2点を別々に鋳造あるいは搾造で1回で造り、それらを入れ子にして組み合わせ

せる方法が考えられるが、これだと銃弾に残る合わせ目や縦位剥離痕の説明が困難になる。

その後、周囲に圧をかけ円堆形とし圈溝を作出する。ただ、その分技術が高度で、手間もかかる。そのためもあったのか、国内製造ではA2タイプは採用されず、はじめ製造で後に搾造になる、同等の効果が期待されたBタイプが採用されたと考えられる。

この製造法がすべてのスナイドル銃弾A2タイプに当てはまるのか、他に弾頭空洞銃弾の製造法が存在するのか、製造国や製造所によっても変わるのかなど、あるいは具体的な製造法の図解や製造機械の確認など近代軍事工業生産におけるスナイドル銃弾の製造法は、今後の大きな検討課題である。

## 5-2 エンフィールド銃弾a2タイプ（第9図）

エンフィールド銃弾の中には、着弾時変形のほかに発砲時変形も散見される。発砲時変形は穴が開いたものやちぎれたようなものなど、通常の着弾時の変形とは異なっている。それらは縦位の鑄バリがあり、弾頭部が中途半端な中高い形の鑄型造り銃弾である。中高い形は弾頭部から溶鉛を流し込むペンチ状鑄型（Nose cast mold）を使用した際に弾頭まで鉛が完全に充填されず鉛不足となり、中途半端な形になったものと考えられる。

発砲時変形は鑄型の不具合により、銃弾側部の厚みが均等にならずに厚い部分と薄い部分があったのが原因とみられ、その結果、発砲時の回転遠心力に耐えられずに、薄い部分が大きく変形しちぎれるなどしたものである。

変形度によって4段階が想定される。多くが鉛不足の弾頭部中高形である。円台孔が1～4は円錐台形で圧入栓使用、5～10はドーム形なので鑄型は別物だろう。ドーム形鑄型は側部がもともと薄いようだ。

1と2は変形度0で目立った変形はないが、1の側部厚に少しの段違いがあり、2は鑄バリと頭部切離痕が明瞭で鑄型左右がややずれている。3と4は変形度1で弾裾部の片側だけ伸びた左右非対称形、やはり側部厚に違いがある。5と6は変形度2で全体に間延びし左右非対称形で、弾側部にちぎれる寸前の穴が開くなど大きく変形したもの。7と8は変形度3で弾側部のほとんどがちぎれるが一部は残存しているもの。9と10は変形度4で弾裾部がちぎれ欠失して弾頭部のみになってしまったものである。

エンフィールド銃弾実包は銃弾と装薬が薬包紙で一体に包まれており、銃弾の不具合は外見では判別しにくく、発砲してはじめてそれと気づくことになる。発砲時には射撃手には大きな違和感があっただろう。こうした銃弾の弾道直進性は大きく損なわれることとなり、戦闘攻撃にも影響を与えたのではないかと考えられる。

この銃弾は数は多くはないが、一定数は確認できる。戦況がまだどちらに転ぶかわからない田原坂の戦い段階で、こうした不良品が実戦で使用されていることを考えておく必要がある。発砲時変形銃弾が西南戦争全期間のうちどの期間どの地域で使用され、それがどのような意味や意義を持つのかは今後の検討課題となる。

出土地一覧 スナイドル銃弾A2タイプ

番号	調査地	挿図番号	番号	調査地	挿図番号
1	市有地（北）	第144図 16	11	本道二ノ坂	第116図585
2	熊野座神社	第 43図144	12	熊野座神社	第 53図644
3	市有地（北）	第145図118	13	みかん小屋周辺	第 91図 65
4	熊野座神社	第 45図265	14	熊野座神社	第 47図344
5	公園北半部	第163図 6	15	市有地（北）	第145図127
6	西原氏寄贈	-	16	本道二ノ坂	第119図739
7	市有地（北）	第145図100	17	本道二ノ坂	第109図237
8	熊野座神社	第 53図643	18	北平古道	第 12図139
9	熊野座神社	第 42図 90	19	北平古道	第 12図135
10	北平古道	第 11図 79	20	熊野座神社	第 50図453

エンフィールド銃弾a2タイプ

番号	調査地	挿図番号
1	本道二ノ坂	第126図1155
2	本道二ノ坂	第126図1149
3	本道二ノ坂	第126図1183
4	本道二ノ坂	第126図1184
5	本道二ノ坂	第126図1186
6	本道二ノ坂	第126図1188
7	本道二ノ坂	第126図1189
8	本道二ノ坂	第126図1161
9	本道二ノ坂	第126図1195
10	本道二ノ坂	第126図1190



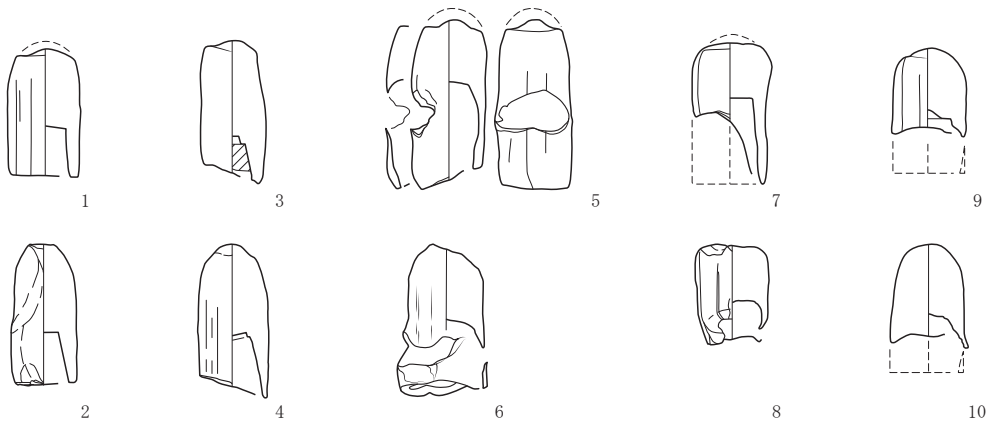
第8図 スナイドル銃弾A2タイプの製造法を示す資料

考  
察

変形度 小



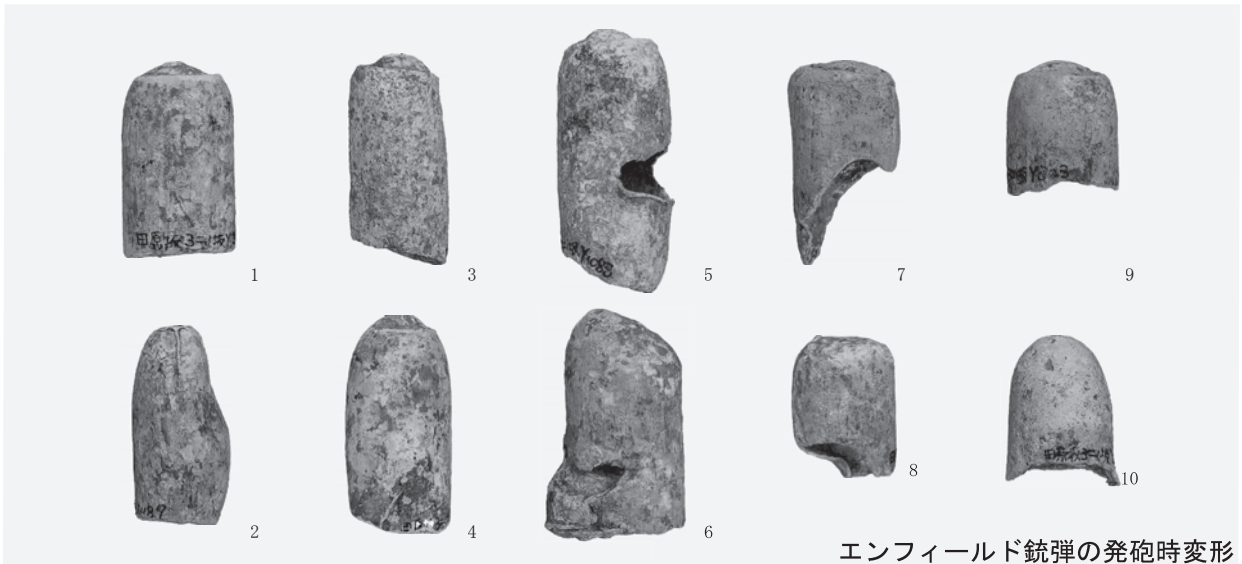
大



本道二ノ坂調査地採集



第9図 エンフィールド銃弾a2タイプの発砲時変形



エンフィールド銃弾の発砲時変形

スナイドル銃弾の圈溝の刻目 (A2 タイプ)



熊野座神社調査地 第45図 261



熊野座神社調査地 第47図 316



熊野座神社調査地 第50図 451



本道二ノ坂調査地 第114図 454



全形

### (6) 小銃弾に残る製造法の痕跡

スナイドル銃弾の圈溝を観察すると、多くの銃弾の圈溝間に多数の細かな陽刻の刻目が巡っているのが確認できることがある（熊野座神社調査地第45図261、第47図316、第50図451など）。それらは4本の圈溝全部にあり、様々な形の三角形で間隔も様々、各圈溝の刻目は必ずしも同一形状でもない。

この刻目は、回転と型押圧で圈溝を作出する際に、旋盤と銃弾が充分にかみ合い回転するようにした滑り止めの刻目であろうことが、文献調査によって判明した。三角形刻目に数種類あるのは、彫線機が複数台あるいは旋盤の刻目が摩耗した際の補刻新刻のためと思われる。また、圈溝がずれたもの（本道二ノ坂調査地第114図454）もあり、回転と圧力で圈溝が作出されたことを裏付ける資料として注目される。

### 資料

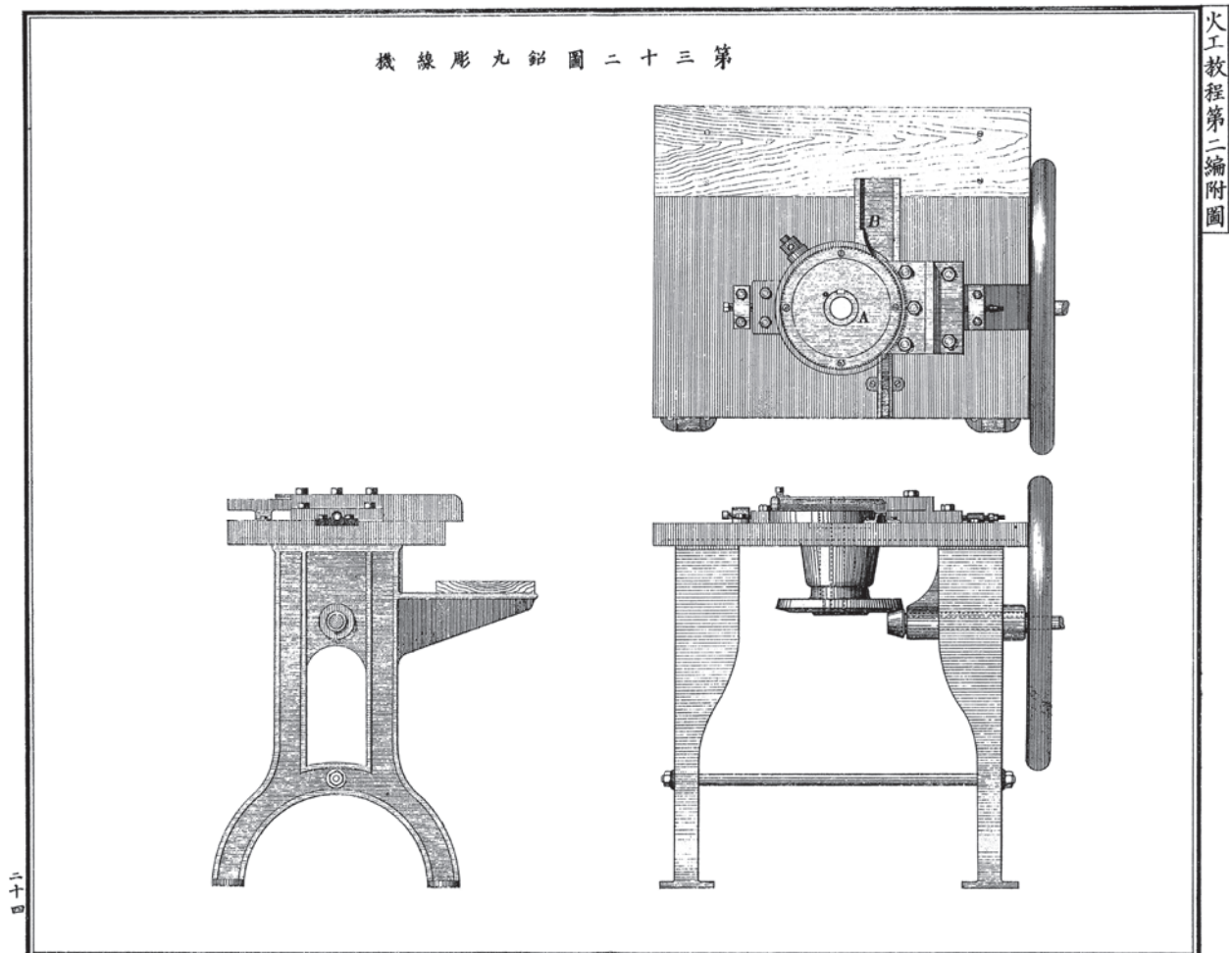
火工教程第二篇 第一門スナイドル銃弾薬材料製造 第五業鉛丸ノ彫線

工具一 材料 鉛丸削底セル、油 要具 鉛丸彫線機一、螺鍵一、槌一、箱 第三十二圖

工業 彫線機ノ基盤上ニ圓旋盤Aアリ。蒸氣ノ発動力ヲ受クルヤ忽チ旋轉シ、且其周邊ニハ鉛丸ノ彫線ニ等シキ四個ノ細溝ヲ有ス。工手ハ送桶Bニ數彈ヲ到シ、旋盤ノ周縁ヘ各彈若干ノ距離ヲ保テ一個ツツヲ押送セシムレバ、旋盤ハ絶エズ旋轉スルヲ以テ、鉛丸ハ其回轉ニ從ヒ之ニ添テ前進シ、漸ク匠ツテ保盤ノ間ヲ過ク。然ルトキ鉛丸ハ兩盤間ニ夾壓セラレ、圓堆部ニ四個ノ細線ヲ彫刻シ、前方ノ木溝ヲ傳フテ箱中に墜落ス。

成品 十時間ニ二万個ヨリ二万五千個ノ彈ニ彫線ス。

『火工教程 第二篇』明治17年10月陸軍省 国立公文書館デジタルアーカイブ請求番号 189-0161



参考図 鉛丸彫線機（縮尺任意）

### 3. おわりに

#### a. 調査の成果

田原坂の戦いは西南戦争最大の激戦としてだけでなく、戦争における最大の画期、転換点であったことが、現地調査や文献調査で明らかになった。その後の戦闘のみならず、近代工業生産などの分野にも多大な影響を与えた戦いだったのである。

西南戦争では小銃種類が多く「西洋式銃器の展覧会」の様相を呈したとされるが、それは田原坂の戦いでの消費銃弾数の桁違いの増加が重大なスナイドル銃弾不足を招き、全国から各種小銃と銃弾がかき集められ戦線に投入された結果である。銃弾不足は新規製造を要求し、材料調達、製造機械、工場建物が必須となり、銃弾や薬莖、材料の輸入も必要となり、多額の費用は軍部だけでなく明治政府全体で負担することとなり、戦後の経済にも大きく影響した。

**調査** 西南戦争遺跡調査は、植木町豊岡台地北部の田原坂本道周辺を中心としたが、調査日数は少なく、調査面積も戦場全体からみると非常に狭い。また、田原坂戦後半の主戦場である南部は、聞き取り調査のみで、金属探知機調査、試掘確認調査などは未実施である。今後は田原坂の戦い全体把握のために、南部の調査が必要である。調査成果としては、聞き取り調査による戦場範囲の推定、土壌分析による陣地存在の可能性、金属探知機を使用した遺物分布調査による戦闘状況や陣地の推定、現生樹木調査での具体的な銃弾飛来方向の推定などがある。これらによって、以前と比較すれば格段に戦争遺跡の理解は進んだ。

#### b. 西南戦争遺跡の特性

戦争遺跡は「有事」の遺跡で、一般遺跡とは遺跡形成理由が大きく異なり、別の特性を有する。西南戦争の場合、遺跡残存度は総じて低いと考えられ、陸上には痕跡が残るが海上や海底には残らない。陸上では地中、地表、地上に痕跡は分布する。遺跡特性を列記すれば、脆弱性、一過性、純粋性、立体性、地形的制約の少なさ、広範囲性かつ限定性がある。また、中世山城跡との関係が深いのも特性の一つである。

**脆弱性**、戦場は現地表面と同面で、胸壁などは戦後には壊される。遺物も塹壕中を除いて、地表面にあるので落ち葉掻き程度でも位置が移動し、薬莖はすぐに破損する。簡単に遺跡が消滅するのであり、景観としての戦場は存在するが遺構遺物は存在しない状況となる。**一過性**、戦闘は数時間から数日の場合が多く、田原坂戦のように17日間も続くことは少ない。塹壕や胸壁も臨時的応急的なつくりで、遺跡形成時間が非常に短い。塹壕は開口期間が短く、遺構覆土も地山と判別しにくく、生活道具等の出土も少ない。**純粋性**、西南戦争は国内最後の内戦で、戦闘期間は文献記録類から判明し、その時しか戦闘は行われない。兵器は進歩し、銃砲や銃砲弾は後には国内の実戦では使用されないの、採集出土銃砲弾は西南戦争の遺物と特定でき、遺跡の純粋性は高い。**立体性**、遺構が地中と地上にあるのは他遺跡と同じだが、遺物が地中、地表、地上にある遺跡は多くはない。地上の崖壁面や現生樹木に埋蔵される銃砲弾は、元位置性が高く資料価値が高い。木造建築物の銃弾はこれに次ぎ、建物や石造物の弾痕も元位置性が高い場合があり、資料価値は高い。**地形的制約の少なさ**、地形を問わず、遺跡が形成される。**広範囲性かつ限定性**、田原坂戦では見渡す範囲はほとんどが戦場である。一方、戦場は南九州一帯に広がるが、戦闘地は限定的である。

#### c. 戦場遺跡の保存伝承

戦争遺跡の主体たる戦場遺跡を保存し将来に伝えていくためには、現状の埋蔵文化財保護とは異なる視点や仕組みが必要で、平和教育、軍事史、景観保護、広範囲、地域住民理解などが不可欠となる。

一般的に遺跡は遺構と遺物で構成される。遺構遺物が確認されない場所では、埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図掲載や発掘調査、現状保存など文化財保護の対象とすることは困難である。戦場の認定根拠と保護範囲の線引き、「周知の埋蔵文化財包蔵地」との関係、保護理由等、検討課題は山積している。